

郎路生麻·幹主

誌雜柳川

大正十三年三月三日第三種郵便特認可
大正十五年七月一日發行 每月一回 一日發行

川柳雜誌 第三卷七月號

湯六郎



事務室から

▲本誌が、質的に量的に、ぐんぐん發展したことは全く柳界の驚異であります。これ全く愛讀者諸君のたまものだと、同人一同感謝いたして居ります。が、いつも感謝いたしてあるだけではいささか物足りないのので、機会さへあれば、經濟が許しさをすれば、讀者の好意に酬い、方法を考へては實行して来たのです。が、今よりも更に質的にも量的にもよい雜誌にしたいものだと考へてゐるのです。さうするためには、ごうしても讀者を現在の倍にまで殖やさなければ思ふだけのこと、充分實行しかねるの種で事務室では、それを毎日頭痛の種にしてゐるのです。▲兎に角讀者を現在の倍にするといふことはさう口でいふやうに簡単にいかないので、全く閉口です。斯うなるご愛讀者諸君の好意に更にお縋りするより外に方法がないので、一人でも讀者の勸誘につさめていただきたいのです。現在でも、絶えず讀者を紹介していただくかたがありますので大變ありがたいと思つてゐるのです。斯う申しあげたからと云つて私達はぼかんと手をつくれてゐる譯ではなく、私達は私達として充分力を盡してゐるので、すから、一層のお助けを願ふのです。▲この頃よく不足税をさられますから御注意を願ひます原稿句稿の場合には開き封三十匁日迄二錢貼附のこと

(二柳子)

川柳雜誌 第三卷第七號 目次

感想・評論

本社六月例会
六厘坊忌
各地柳壇・川柳家戸籍調へ
編輯後記

馬行生
二柳子

大空を求む

麻生路郎

河岸を換へた事

井上刀三

貧乏の仲よしの私

安川久流美

忘れ得ぬ事ども

木村半文錢

創作

塚崎松郎
黒木莢豆
喜田飯山
林田馬行
酒井駒人
森田輝翠
岩崎柳路
庄万よし
橋本二柳子
森東魚
諸家

研究・其他

川柳塔

唐柳短解

蛭子省二

病弱の句を選して

林田馬行

くだ

竹馬居主人

子規と六厘坊

万よし生

柳談會餘滴

遅日莊主人

いそがぬ旅

龜井花童子

夢を捨てに来る人々

麻生葭乃

募集句

同

職人

森東魚選

僧

矢田右大臣選

齒醫者

松雨・雅幽共選

粒々集
近作柳樹



大空を求む

麻生路郎

病氣さいふものは、いろんなことを考へさせる。そんなに偉くない人間でも、一寸乙なことを考へさせる。忙しい人よりも浪人が、いかにも偉さうなことを考へ出すのも、この部類に屬するらしい。

病氣の中から一年有半が生れたり、子規の俳句が生まれたりする。そのかはり一層死んでのけやうかなぎゝいふ無分別も起る。透谷や眉山も出る。しかし達者でも有島武郎のやうな詩的ぶらんこも出るから、あながち病氣でなければ駄目だ病氣を讚美してゐる譯ではない。

僕は近年よく病氣をやる。ほちほち偉くなる前兆だと言へば言へられぬこともないがたゞ病氣だけは一人前にやつても、偉くなる方は半人前も進まないのではありがたくもない。まだまだ僕は準備時代なのであるから、

今殺ろされては甚だ迷惑をする。もう少し待つて貰ひたいと思ふ。

文字を知るは苦のはじめなりで、僕はなかなかの文字を知つたために、その文字によつて家族を養はなければならぬ。川柳を立派な藝術として天下に普及せしめなければならぬ。それは大それた考へかも知れないが、僕にまつては、大それた考へだとも思つてゐない。是が非でもやつて見せる。それが青洞門を穿つことよりも幾層倍の難事業であらうとも、それは今の僕には問題ではない。ただこつ／＼穿つのみである。そこでハタ／＼突きあたらうとも、それは問題ではないのである。案外早く青い碧い大空が見ゆるかも知れない。いや僕自身の死を前にして必ず大空を發見するであらう。それを求むることのみによつて生きる今の僕である。

河岸を換へた事

井上 刀三

腰辦こし云ふ情ない稼業かせぎを始めてから、性來氣儘せうらいきま者で、其上飽あまき性の僕は、河岸を換へる事實に三回、その三回目、さても窮きう快にしては奇妙な審音器しんおんき界かい云ふ社會に這入つてしまつた。私も既に二十五、今迄のやうにそう香氣な事も考へて居られない。僕の親父の云ふ事に依れば、彼は二十四五才の時には既に、一男一女を舉げ、頻に貧乏世帯を切り廻してゐた云ふ。國稅何圓也を納めてゐた云ふ。平凡に聞けば至つてつまらない話だが、靜かに考へてみるに、親父の述懐は、今の僕にまつては正に恐るべき事である。朝にヴェニスの流れを夢み、夕に伯爵未亡人に踊り狂つてゐる様な麗はしい空想に、微笑んでゐるわけにもゆかない。

啄木に泣き、白秋を嘆じて「お、青春よ！」てな事も言つてはゐられない。勤しんくさも、男爵令嬢に見染られて、今日は熱海明日は帝劇ていげつ云ふ様な妄想から免れなければならぬのだ。

今度こんど云ふ今度は、尻をさつしり落ち付け、水屋の一本、下駄箱の一本も買ふ丈の基礎を作らねばならないと思つてゐる。それに今度の稼業は頗る愉快な奴だけに好んで勤けそうだし、仕事しごと云へば、景氣不景氣を超越こして、僅かに社長の機嫌を奉伺してゐれば、いゝわけで、其間、社長の書信の原稿をかいた

り、廣告の文案を提出する位の事である。しかし今のこころ頭痛の種は、その書簡文を書く事である。由來書簡文なきに爪の垢程の興味も自信のない僕には、何時も決まつた様に「拜啓時下……被下度先づは右……敬具」しか來ない。文字通り「拜啓陳者金貸せ頓首」の部類に屬する慘めさで、その上、實に毒々しい惡筆さきてゐるので、タイピスト女史、僕の原稿には、全く閉口なすつて「あはれ青春を臺なしになさるわ」なごさお嘆きになる。

廣告文案は奇怪にも鮮かなものだご自分ながらその奇抜さに恍惚くわうくわうするのだが、これは嘗て何等の經驗もない僕の奔放な技巧が却て奇利を博するのかも知れない。果して僕の作製に係る廣告文の影響か、然らざるか、昨今各地より註文の殺到する事は事實である。

これは戯談ぎだんとして、廣告の意匠なり技巧に就てはの研究には殆ど際限がないのではあるまいか云ふ恐怖に襲はれてゐる。「商戰場裡優越の地歩を占むる人は、宣傳廣告の巧妙な人である位の定義よ、廣告の常識だから、充分心得てゐるが、その「廣告に巧妙なる人」たらんには、普徹の思ひをしめても足りない事だ。廣告術を初歩から練習する事は僕にまつて目下の急務、

敢て六十の手習に甘んずる心算である。それと同時に、評論に劇に、歌謡に、浅いなりにでも通じなければならぬ。此頃は、何んでもこいこい自惚れてゐた僕でも實際事に當つて見るに實に無能力である事が判る。就職の第一日なき、社長が僕を呼んで原稿をかけ云ふ。僕は最初の仕事に對する極度の興奮から、あらん限りの神妙ぶりよろしく恐るゝ伺ひ奉れば、社長はいこ徐に『著音器界の根本的發達』と題して評論を書け云ふではないか。流石の僕も暫くは啞然としてゐたが、已むを得ない。悠々自席に歸つたが、扱て何から論及すべきか、著音器界とは如何なるものか、朦朧たる輪廓さへも掴めないのは當然だ。

窓外に眼を轉ずれば、恰も五月の陽光は幸福に満ち輝いて、満目の嫩葉は重い風を送つてくる。漸くにして歪みなりに構案は樹てたが、今度は容易にペンを運ばない。こんな時には痛切に、貧弱な頭を呪はずには居られない。詭辯詭辯、五里霧中に勝手な氣焰を上げて、漸く『拙文よく諸彦の覺醒を促し得ば幸甚』と結んだのである。幸にして斯文は、社長を駈からず感嘆さして了つたが、あの時の事を思ふと冷汗一斗の思ひがするのである。

何も經驗だ云ふので課せられた仕事の中、レコードの文句取程惱しい仕事はなかつた。文句ごりは、レコードを蓄音器にかけておいて、その文句なり歌詞を白紙にこる事である。それがとても面倒な仕事で、それでも、比較的癖のない演奏者なればよいけれども、言葉の抑揚に變な癖のある人のもの

には、本當に泣かされて了ふ『花は城山、紅葉は龍田』を『娼は死んだし、むつきは散つた』なきに聞こえてみたりする。斯うした様に先ず最初に自分の聽覺が間違つた音律を掴んだものならもう助からない。何べん繰返しても、依然として『娼は死んだし……』にしか聞こえない。こうして一枚のレコードのしかもその一個所のために、腹立たしい半日を送る事すら度々なのである。こんな時は本當に吹込者が居てくれたらと思ふ。

同時に吹込者の吹込に於ける生意氣な、そして氣取つた姿體が眼に見ゆる様で、赫つみなつてしまふのである。諸君がもし夏の灯の下、藤椅子にも寛いで『いいメロデーだ』なんて、レモンスカツチでも片手に、楽しくレコードを聞く事の出来るまでには、當然の事ながら、こうした人しれぬ苦心のある事を言つておきます。吹込に就いても随分興味深い話もあるがこれは可なり専門的な事だから後日に譲るが、唯、吹込に来る人に、キネマスターあれば、名優あり、凄麗な伎あれば、失明の家元もあり、オールパツクのピアニスト、飄軽な落語家等々、舞臺や、プロマイドでみるよりも餘程面白い。而して、誰かが云つた如く『夏は雪ある北の渚、冬も汗湧く南の小島まで、これあるが故に、座して名人高手が美妙なる肉聲も、管絃も手にこる如く聞き得る嬉しさ』さくるのだから、二三年も経ては、今迄はお青樓へ行つても飲んでばかりゐて、ニタ／＼笑ふにすぎなかつた僕も自ら天晴れ、諸藝に通じて、満座をヤンヤ云はせる様になりはしないかと思つたりしてはるが、これは單なる相愛にすぎないらしい。しかしこうした華やかな、社會に居るご何だかサラリーなんか要らない様な氣もするのである。

本社六月例会

六月一日午後七時
於 日本橋俱樂部

路郎、舟人、文久、三平、万よし、百雷、波郎、飯山、かほる、のぼる、山月、一正、
碧樓、明烏、紅鳥、夢遊、閑路、三笑、突支坊、仙秋、乾坤、塊人、ひろし、久郎、一
路、博久、三樂、莢豆、刀三、二柳子、馬行 (出席名簿より)

壺 (兼題) 路郎 選

嚴として壺は先祖の中にあり 馬行
掖壺へつまづく程に慌てゝ居 夢遊
位置替。壺は二人でかゝゝわれ 三平
砂糖壺蟻に置場が又變り 史朗
瀬戸物屋壺は奥まで来て貰ひ 一路
失せ物に壺のあたりへ灯をもし 十字路
靜物に題しゆがんだ壺をかき 万よし
蛸壺へ今宵限りご知らずして 塊人
消壺を土間へ出させて母は寝る ひろし
壺の艶中の古さに關らず 波郎
取込みがあり水壺の水が切れ かほる
(佳)手探りへ冷や觸れた壺の肌 悟郎
(佳)同じ壺壽計屋は刷毛の間違ひ 一路
(佳)瀬戸物屋十時を壺が締め出され 舟人

毒婦 互 選

もう呑めぬ酒を毒婦は持つて来る 明烏
毒婦へは男無言の日は續き 二柳子
眞實の戀に毒婦は行止り 一正
休日の晝を毒婦に云ふに逢ひ 夢遊
毒婦からみれば念佛もの足らず 莢豆
毒婦にも親の情のわかりすぎ 同
毒婦行く道を蝠編低う飛び 碧樓
この人はご見て毒婦聲を替へ 同
云ふだけが野暮。毒婦すまじ居 百雷
今日だけは悪き毒婦になりすぎ 同
毒婦今日娘のなりで稼ぎに出 閑路
この雨を辛ひ毒婦裏から出 同
惚れてゐる男を毒婦奪つて來 波郎
最合傘毒婦は悪き蹴まつき 同
毒婦若く見られておごるなり かほる
ゆうべから毒婦さく歯が痛み 同

毒婦もう子供の出來ぬ事を知り 三笑
警澤に母を暮らす 毒婦にて 同
ウイスキー毒婦も酔ふた顔に 一路
氣の弱い男に毒婦斬られたり 同
雨の音きいて毒婦の氣が變り 馬行
毒婦の煙管男見上げる 同
逃けて來た毒婦の櫛が落ちかゝ のぼる
毒婦この頃病氣してゐる 同
縫ふやうに毒婦闇から闇を逃け 同
上海から戻り毒婦に扱はれ ひろし
捨てた兒の年を數てゐる毒婦 同
貴婦人のやうに毒婦はかしつゝ 同
酒を呑む毒婦の喉に音があり 舟人
毒婦もう女海灘を寝て了ひ 同
釜山まで片道を買ふ毒婦なり 同
絞り上げてからの毒婦の捨科白 万よし
毒婦もご金ご容貌で貰はれし 同
支那の大臣に圍はれ事も 毒婦 同
今日も雨毒婦の酒が足らぬなり 塊人
毒婦今日女になつて髪を梳き 同
花道を毒婦に逃げる 豆絞り 同
行きすぎた毒婦へ野暮な立話 同
毒婦も矢張り戸を立て寝る 飯山
毒婦の油斷亭主寢盜られ 同

別れ際毒婦にしては未練なり 同
 毒婦今日中將湯を飲んで寝る 同
 蚊帳吊つて胸算用のある毒婦 文久
 櫛なめて毒婦の思案長過ぎる 同
 胸高に毒婦の帯はゆるんでる 同
 襟垢の儘で毒婦は國を發ち 同
 眞夜中の毒婦は庭を掃いてゐる 刀三
 御許様へ毒婦書き終り 同
 戀人へ毒婦女になつてゐる 同
 別れる氣だな毒婦に睨められ 同
 御寮人になつて家乗つ取る氣 路郎
 口説かれるや仕向毒婦逃げ 同
 その毒婦亭主の甘さにもあきれ 同
 骨抜きにされた毒婦を諦めず 同

病弱 馬行選

病弱の父に鉢植あるばかり 文久
 病弱へ素氣なく返る履歴書 一路
 病弱にして兩親の愛を知り 乾坤
 病弱の似合しからぬ事にこり 明鳥
 代金引換で病弱へ届くなり 舟人
 病弱の産み落したは死んで居り 久郎
 病弱の妓に艶種が多すぎ 塊人
 病弱の家ごも知れる乳の壘 碧樓
 牛乳に病弱の身ご思ふ朝 同

病弱の白い枕で寝つかれず かほろ
 病弱の機嫌白足袋履いてゐる 同
 病弱の猫背をみなで不憫がり 刀三
 親爺は低級ですよ病弱 同
 弟の厄介ですご吸入器 路郎
 病弱の子に煙草屋をさすつ 同
 病弱は草履ばかりを履き馴れる 波郎
 湯の町を病弱らしう散歩する 同
 着飾つた病弱の娘の無理を聞き 同
 節式へ息子をやつて二階に居 同
 儲け話に氣乗りせぬ程弱り 同
 同僚にこの冬シャツを見つけ 同
 (佳)病弱へ久々云ふ將棋盤 文久
 (佳)弱いで弟子一人減り二人減り 飯山
 (佳)病弱の氣持は櫛を入れた後 博久
 (佳)病弱と氣が合はバロコニー 一路
 (佳)病弱ですつと妾の方にある 路郎
 (軸)弱虫か此頃須磨にゐるさ 馬行

金魚 互選

子が死んだ家に残つた金魚 鉢路郎
 金魚今朝諦めたかに死んでゐる 夢遊
 金魚の死もウタ立もあがら 文久
 金トトへわるさの指の太いこ 塊人
 健者な金魚跳ねて出て死に 同
 動かない金魚に冬の底を知り 乾坤
 父親のついでに負けて買ふ金魚 山月

一錢を値切つて金魚五匹買ひ 紅鳥
 つかまれた金魚案外い一度胸 一路
 賣れて來て金魚屋の荷が重く 同
 金魚の死素氣なく鉢に陽が當り 碧樓
 金魚驚く顔ぬつと出る 同
 留守の家らんちゆう重く泳いで 波郎
 死にかゝる金魚に畫寢起しに來 同
 年越しただけ落ちつき 同
 降つてるをよそ事に金魚浮き 万よし
 金魚遂に鉢の中なるを知り 同
 金魚大きく小の新緑の候を病む 刀三
 金魚の白さの中の金魚の死 同
 不意の差水に金魚は腹をみせ 馬行
 金魚泳いでゐる斗りなる枕許 同
 大寫し然と金魚が眼に迫り 飯山
 御寮人金魚を買ふに下駄を履き 同
 浮草に觸れて金魚は向きを替へ 同
 買ひたした金魚の方が先に死に 同

雜

吉日が疊で知れる裏長屋 三樂
 塔を見當に團體近くなり 二柳子
 宿替に水がきれいな井戸もよし 一路
 吐られて出た兒は虹を見て 同
 筏乗り流れる儘に花を見る 同
 働らいた丈を厚司の背はやけ 碧樓
 握り飯腰に山賊家を出る 同
 苦面した古着で舞を習はせる 同
 運轉手虹へ虹へご鉈を取り 刀三
 居候が今は高座に生きてゐる 馬行
 路郎

病弱の句を選りて

— 席上吟の陥入る弊 —

林 田 馬 行

いゝ句を作りたい。然しいゝ句はなかく容易に生れるものでない。そこに我々作家の悩みがあるわけである。いゝ句が苦しまずにいくらでも出来るとしたら案外川柳はつまらないであらう。いやつまらなくなるであらう。そうすれば一體いゝ句を作るにはどうすればよいか。いゝ句を生まんにはいゝ頭さいい腕さがないければならない。いゝ頭さ云ふ問題はここでは後日に譲つていゝ腕をつくるにはどうすればよいか。初心者の方々は多作するののも一つの方法であらう。然しそれよりも私ば句の批評し合ふ事をおすゝめ

したい。之は新しく川柳を初められる人であらうが、十年二十年句に親んでおられる人であらうが、共に怠つてはならない事であらうと思ふ。處が現在の川柳家を見渡した處さうも句の批評をされる事を嫌ふ傾向があるやうに思へてならない。之は皮相の觀察で私の僻目かも知れないが、私にはさうさしか受取れぬ。またさうさしか受取れない場合によく出くわす我々はもつと眞つ裸にならなければならぬ。體裁をつくるつてゐてはいけぬ。虚飾を憶れてはならない。自分の作品を非難された場合何故ぐつと突つ込んで質

問しないか、反駁しないか。教ねを受けないか。誰も黙つてゐるのに自分だけ發言する事は生意氣のやうに見られるから云ふかも知れない。然しそんな懸念は全然無用である。一人の質問が一人の發言が一人の反駁が全員を裨益するとしたら、是程結構な事はない。

私は嘗て選者が短評を加へない事を不服に思つた事があつた。自信の句が没になつて不愉快に歸つた事もあつた。

然し今にして考へて見るに、選者が時間的關係なきで批評の加へられない場合が可成りあつたやうに思ふ。自信の句さいふのを後程出して見て案外つまらない句であつたりしたのを覺てゐる。

斯うした事柄を已むを得ないものとして看過すれば出来ない事もないが、斯うした不満をたまへ短い間だけでも胸へ藏つておく事はくだらないやうに思ふ。話し合へば立ち處に氷解する程度のもものが多いやうに思へるからである。

只斯うした場合選者も質問者もお互に謙讓の態度を以て望まなければならぬ。

事は云ふまでもない。

斯うした観念を一般に普及して實行する事は、事だと思ふけれど、人各々性同じからずの譬でさう簡單には行かないであらう。只私個人としては今後ともこの態度で進みたいと思ふ。故に私の選句に對しての疑問には遠慮なく質問していただきたい。反駁していただきたい。必ずや是に對して御満足に近い回答を與へるであらう。またその反對に私は私の選句者に向つて教むを受ける場合もあらう。

そうした時の無遠慮をも赦して頂きたい。今からお願ひしておく次第である。然し私はこんな事を書くのが本意ではなかつた。私の性格として始終氣がかりであつた事を今爰にさらけ出して賢明なる諸兄の御批判を仰ぎたい意にほかならなかつたのである。

云ふのは先日例會の席上で私が課題吟『病弱』の選をした。其時眞戴出來なかつた句だけを持つて歸つてその後ゆつくり拜見した結果、句會の作品に幾多の缺陷未熟不用意、無理のある事を發見し

たのである。今私が僭越にもそれを指摘して、日頃の責務を聊か果たしたいと思つたのである。以下の官評はもさより新しい人、初心の方々の爲めの記事であつて、例會に出席される幾多の先輩諸兄、並びに自己の作品に相當自信を持って居られる方々は見逃して載いていゝ記事なのである。まづ最初に題詠の場合に陥り易い傾向を指摘したい。その前に題詠川柳に註文がある。即ち課された題を一度頭で消化して自己のものとなし、然る後吐き出す方法を取つて貰ひたい云ふ事である。一般の（おもに關西）作品を見るにさうも課題を消化し爐過されてない場合が多いやうに思へてならない。

例へば『病弱』とか『青春』とか云ふ題が課されるさう『病弱』が『青春』が先づ上五を据へ然る後下の十二字をくつゝける方法を取つてゐるらしい。是ではまるで冠句である。冠句必ずしも悪い事は云はないが、さうした場合多く課題ミ下の十二字が不自然な配合になつて了ふ場合が多いからである。即ち左の數

句は是をよく證明してゐる。前以て云つたやうに課題は『病弱』である。

病弱は秤の上へ乗つて見る

病弱が道を歩くさ醫者に逢ひ

病弱はぐつたり風呂に草疲れる

病弱の隅で拜聴して居るだけ

つまり『病弱』の説明が多く、病弱云ふ固い文字をそのまま用ひたために不自然さを暴露してゐる。斯う云つた場合『弱』とか『弱い身』とかの文字を臨機應變に適用したら幾分この弊害から脱れ得るであらう。

是等の文字は理屈なしに『病弱』に通ずるし、また無雜作に用ひたさしても表裡に留意したら何等缺陷を現はさず済むであらう。尙最後の『病弱の隅』の句は『病弱が隅』の方が穩當であらう。何でもない事であるが、斯うしたてに、はの疑義は句會の席上吟に多い。課題に捉はれる云ふのは如上の例がそれで課題廢止論者も爰に於て起るわけである。課題を取り去つても一句さして確固たる存在價值のあるものでなければならぬ

のである。であるから我々は課題に捉はれない事に心掛けるに共にまた一面課題に忠實でありたい。

あの生徒だけの雨傘かゝつて居る云ふ句があつた。境地には可成り惹きつけられたのであるが、この句は「病弱」云ふ題があるから初めて活きる句であつて獨立したら何が何だか解らぬ漠然とした内容になつてしまふ。つまり考へすぎたのである。重ねて云ひたい。題に捉はれず然して題に忠實であれよ。次に調子の事を云ひたい。調子とは所謂韻律の事であり、リズムの事である。リズムを無視しての詩がなく藝術のない事は餘りに多く云ひ盡されてゐる。以下の數句は調子に於て既に作品としての價值を大半失つてゐる云つていであらう。

母の案ずる程病弱でなし
病弱へおもおもしい陽が當り
病弱は娯樂場をいや云ひ
大望を次ぎく病弱消して
兄の病身弟備けてる
病弱身に故郷の氣つかはれ

病弱の燈籠に灯を入れよと命じ別荘に寝てゐる氣になる店の事

以上の句を頂戴出来なかつたのは既に調子に於て缺陷があつたばかりでなく凡想でもあつたからである。「燈籠に灯」の句は稍々情趣が出てゐる戴きたかつたのであるが下五の失敗に躊躇した次第である。下五「入れよ云ふ」の方がまだよくないか。

「病弱身に故郷」の句は「病弱の身に」の間違ひであらう。こんな間違ひは始終有り勝ちであるが、作者の損な場合が多い御注意したい。最後の句の中八「寢てゐる氣になる」は「寢て氣がゝりな」でよくなるであらう。

病弱の亭主へ粥が出来上り
云ふ句があつたが既に僕の句に
病身の夫勵ます膳が出来
云ふのがある。

おきなしい子に病弱が付きまこひ
云ふ句があつたが、嘗て綠天氏の句に
心配は病身な兒の器用すぎ
云ふ句のあつた事を覚えてゐる。この二句を比較した場合勿論綠天氏の方へ團

扇をあけなければならぬ。

病弱にして天才は恵まれず
病弱にして惜しまるゝ才を持ち

の二句は「才子多病」の譬そのまゝであり凡句である事は否めないであらう。尙左の句は僕の選眼で凡想であるこみこめたものである。

病弱の床へ淫世は梅雨さなり
病弱の床に哀れな幾星霜
子供等の末を病弱考へる
病弱の身に責任が重すぎて
死に面した病弱の人のうめき
病弱があつて陰氣に暮れてゆき
病弱の夫婦へ又も子が生れ
病弱の姉へ妹の縁談
妹の縁に疲れる弱い姉
病弱が波ばかりみて軽い咳
病弱はたつた一人の息子にて
この外にも書きたいが是では限りがない
層層なる筆を幾重にもお詫して擱筆する
事にする。尙疑義に對しては直接愚生死
御質問に預りたい。(六月十九日夜記)

夢を捨てに來る人々

麻生霞乃女

○
あはたゞしく暮してゐる中に、藤椅子や、紅茶に最もふさはしい初夏の氣持ちが、いつの間にもやら逃げて行つてしまひました。武庫川堤にほやかに咲き揃ふてゐた月見草はさうなつたでせう。武庫川には眼と鼻の近くに住んでゐながら、私は年に一度も月見草を見ない事があります。實際、私は五六町の散策の時間も惜しまねばならない程、家の仕事に追ひ馳けられてゐます。金儲けの下手なのが男の甲斐性無しなら、私の様なのは確かに女の甲斐性無しです。けれども何人にも惜しみなく施す寛大な自然は此甲斐性なしにも、一つの幸福を授ける事を忘れませんでした。それは自然が與へて呉れる心の

静けさでありました。

馬啼の音で明ける筈の鳴尾の朝はまだほの暗いうちから、雀の囀りが聞えます。夜は明滅する戸毎の燈を遠くに望んで、みだれ鳴く蛙の聲がきかれます。茨豆氏は嘗て『鳴尾の蛙』讚岐の蛙こは鳴きかたが違ふ』とか云つてられた。此頃は梅雨晴れの不快な天候が続いて、毎日〱磨硝子のやうな空を見て暮さねばなりません。春は紫の粉がうづまく圓天井の下に、鳴く雲雀の聲を耳にして自分の居所さへも忘れる事があります。

つばくらが白い腹をひるがへして袖の下をくぐる時には洋行でもしてみやうかと思ふ様な軽い情緒がそゝられます。一番心がすみ切つて嬉しく感じられるのは十月の初旬です。七月になつ

たら、また氷山の様な純白な雲がかぶ様になります。子供に添乳をしながらその雲の動かすにゐる蒼空には遠洋航海の夢を講がくなぎは閑人のひまつぶしの様ですが、夢を見なければ暮されない人達にはそれがまゝ心の糧とも云ふ事が出来るでせう。

分け前が少いから云つて、悪戦苦闘して働く世の中に、夢を見て暮す人も可なり多いものです。よく金を拾つた事のある、半六氏は此遅日莊へ夢を捨てに來ます。美の作氏はセンチメンタルな旅物語や、草花栽培のために白晝街路に馬糞を拾ひ廻つた實際談をしに來ます。此人達が集まつてやる夢物語はこても餘人の思ひ及ばぬものがあります。

六厘坊忌

五月廿六日午後七時
於 築港託兒所

故六厘坊の十八回忌を五月二十六日午後七時から築港託兒所に於て營む。當夜路郎先
生より故人に就いてお話がありました。尙左記の方々より兼題句を寄せられました。
五葉、光太樓、靜雲、山雨樓、紫光、靜寂の諸氏（二柳子記）

當夜の出席者は路郎、刀三、庵歩、飯山、かほる、ひろし、突支坊、一枝、文久、乾坤、
一路、南枝、碧樓、茶の木、冷笑、眠聲、万よしの諸氏と私

丸刈（兼題） 路郎選

濱

互選

丸刈で校長押して行くつもり 山雨樓 濱へ来て蟹のお宿を見つけたり 文久
丸刈を床屋手輕うしてしまひ かほる 朝船が着いたか濱の人通り 碧樓
丸刈は弟弟子に廻される 茶の木 濱傳ひ来て振り返る 曲り様 茶の木
丸刈で逢ふ藝者は兄にする 文久 濱風を心中者は知らぬ也 一枝
似ごります。丸刈のあさの椅子 飯山 この濱を通つたらしい下駄の跡 蔦歩
息子の年が丸刈を嫌ひ出し 突支坊 丁度いゝね。すぐそこ海が見え 眠聲
丸刈のむしろ露骨を嬉しがり 刀三 濱へ出てはつきり見わた 帚星 一路
病人にその丸刈を羨まれ 二柳子 音に聞く名所の濱を淋しがり 同
二つ三つ丸刈にした休みの日 同 口論のつまらなさ一人濱へ下り 万よし
五分刈で一葉女史の事も云ひ 五葉 憶ひ出のその海岸の變りやう 同
五分刈のくせに六厘やかましゝ 同 濱へ来て大きい聲を出して見る 乾坤
丸刈で握つたげにのあたゝかさ 路郎 主のない船が濱邊を怖がらせ 同

丹前を通して濱の寒い事 かほる
濱へ来て女は何か拾ふなり 同
濱へ出ただけで旅館へ引つ返し 同
風颯々昔ながらの濱に立ち 飯山
誰も居らぬ濱邊を浴衣きて歩き 同
いつも来る濱で漁師の兒に馴れ 同
砂濱の素足に軽い氣持なり ひろし
濱で會ふ外人の子に話しかけ 同
やけたね。溜まで友は訪ねに来 同
まだ生きるつもり濱邊へ移つて來 刀三
軍艦の通らぬ濱で年をこり 同
濱に近く住んで三越煩はせ 同
食前の藥濱から戻つて來 同
濱邊まで見にやらされる 許嫁 路郎
お隣りも轉地と見えて藻を拾ひ 同
犬洗ふことも仕事の濱の家 同
濱へ出て隣りのメリーも出る 同
濱へ来て慰めやうに困るなり 同
洋服 文久選
夏休み浦酒な服で次男來る 乾坤
勤續の服は不平もなく動き 同
洋服に母は勝手手の違ふ針 碧樓

洋服を脱いで夕餉の父ミなり 同

洋服は亭主が疊む事にきめ 万よし

洋服できた棟梁を見違ゆる 茶の木

洋服を着てるだけに羨まれ 鷹歩

洋服のあぐらを組めば猫背なり かほろ

椅子席に来て洋服の肩がこり 南枝

洋服の中へ忘れた認印 一路

洋服さんには素氣ない流行妓 刀三

相談をして洋服を着る養子 路郎

洋服で逢ふミ奇蹟のやうに云ひ 文久

不平 刀三選

不平家は今日もレールレールに沿沿て去去て 飯山

不平云ふ男で金も貸して呉れ 同

殴られたやうな不平の姿勢なり 文久

云ふまでの不平に銚子並ぶなり 乾坤

弱虫のくせに不平を並べたて 茶の木

黙つてはゐるが不平の仲間なり 二柳子

騒々しい方へ幹事が来て坐り 南枝

職長は不平の中に腕を組み 一路

金の事は云はずに辭事にきめ 路郎

鮮やかな不平爆發してしまひ 万よし

(佳)物足らぬ不平水屋に音音がす 南枝

(佳)諦めた不平は金を借借に來る 文久

(佳)へいへい云へ云へへも腹腹はは 路郎

(佳)重役をみんな旨旨にししまひ 同

(軸)老老役役又バトロバトロンン來來 刀三

せめてものいい細君細君を持持てる 同

粒々集

柳風スポーツ(五)

森 東 魚

灰掻きごおつかつかつをゴルフ持ち

ハードルを越す大の字はチトひしやけ

ゲットセット猫が怒つた構へをし

尻を喰らへへはバツクの叩きやう

サード迄來るミ寫眞屋又出かけ

練習は外野の肩を褒めてすみ

盜壘は砂を蹴立てて景景になり

ホームランホームへ來るミ抱きつかれ

ウオーミングさてはピッチが替るぞや

かにかくに母も子故のフアンになり

(大正一五・五・二三・稿)



忘れ得ぬ事ども

—俳句から短歌に、そして川柳に—

木村 半文 錢

一三年以來、めつきり衰弱した私は、今年の二月頃から一層に度を増した。もう、永い人生も有るまいと思ふに、吾れながらセンチメントを抱く。殊に近頃は、なんだか昔のことが懐かしくてならぬ。慌しい生活に追はれて、しみじみ追想する

餘裕をもたなかつたが、何うにもならぬ現實に打ち衝つて、却つて淋しい中に追想に耽る時間を見出した儘でもある。慌しい生活—それは今も深刻に自分に迫つてはゐるが、病氣さいふものには打ち克つ術もない。たゞ何うにもならぬ環境に、ほつとした呼吸を吐くのは、まだしも悪因縁だと思ひながら、川柳の慰安、諦観或は庇護かも知れない。いづれにしても、微苦笑ものには相違ないが、その悪因縁の川柳關係を、少し回想してみた。

私は以前俳句を試みた。俳句から短歌に、そして川柳に—と變な歩み方をして來たものだ。俳句の手ほきは、野田別天

樓先生であつた。それには少し面白い話がある。これは私が商賣人の子でありながら、へんな文學青年としての歩みを開始する。そちの導因である。

私は大阪の南外れの、ほんの田舎の小學校に通つてゐた。その村の學校に、可なり古くから教鞭を執られてゐたのが、野田先生である。私は、高等三四年を通じて、修身、作文などの分擔教授を受けてゐた。四年になつた冬の事、作文を習ふ時間だつたが、折から雪が降つて來た。私達の教室は、二階の明るい—三方に硝子をめぐらした—新しい建物であつた。だから吹きつける雪が、硝子障子の外方の棧に、結晶を重ねて行くのも無然として見ることを得た。先生は、その雪に就いて、初めて俳句なるものを教示された。詳細は忘れだが、例の「雪の朝二の字ノ下駄の跡」なきが、例句の教材となつたことは記憶してゐる。しかも生徒の中のひやうきん者が、それを模倣し

て「雪の日にたぎんくの靴の跡」を吟じてあの温顔無比の先生をして、抱腹絶倒せしめたのも印象に残つてゐる。

その時、私は「ひらく雪降り積る屋根の上」をアツサリ窓外の田舎家の實景を咏んで、大層先生に褒められて面目を飾したが、實は、この時の十七字を口咏んだことが今日の川柳に直接の關係はないにしても、斯うした環境を慕ふ因をなしたことは、幸か不幸か雪の俳句を口開きした其の日に出發してゐるやうである。それからは、作文の中に、俳句を交せて先生に朱點を入れていた事、何度か重なつた。俳句自在、俳諧のしほり、なごを求めたのも其の當時で、しかも二三の友達と、コンニャク版應用の、學生新聞を刷つたなき、可なり熱が高かつた。が、その高潮した機運の中に、たうく卒業してつて俳友はちりちり、先生とも交渉が断へてつた。が、先生との機縁は、その後窓曾誌を發刊した時（その時はもう既に先生は富田林中學校で教鞭を執られてゐた）再び結ばれて、俳句の御指導をうけた。何度も、何度も、手紙の中に封入しては、先生の朱點を仰いだ。面倒にも思はず、随分さ出鱈目な俳句に、懇々批評し指導の鞭を加へられた先生の温情は、今に回想しても涙が催される。ごこでも先生は、温容の君子で、高潔な人格者であらせられた。それを思ふと、久しい間、お手紙を差上げず、しかも俳句をけろりかんと捨て、川柳にいそしむ自分を見出す時、先生にまで詫たいやうな、濟まないやうな、氣分に打たれる。

先生も、私が斯うしたものを書いてゐるのを讀まれるか、又は人傳にでも聞かれたら、定めて御苦笑なさる事であらうか、微かに、その頃の御記憶を辿つて、私さいふ一個の少年を回想せられたならば、先生の俳句講義も、斯うして文學道に這入つて行く人間の運命にまで及ぼしてゐる、空しい結果を味つけらるゝであらうか。と言つても、これは先生の俳句が禍をなしたものでなくて、私の先天性の然らしめる處である。こんな事で、へんに教育家の眉を擧めることは無論私共の關心に觸れない。別天樓先生にしても、同じ意味で俗な教育家に微笑を送らるゝであらう。

學生新聞で思ひ出すのは、私が書いた處女作「柴賣り子」である。内容もスツカリ忘れてゐるが、この題名だけは記憶にのこつてゐる。アレが今一枚でも手許にあると定めて實感を深くするだらうと思ふ。大杉原の一枚刷であつた（大きなコンニャク版であらうがな）。これも二三の學友と、頭をあつめてデツチあげたのだ。一三度失敗して、私の家であうく刷にかゝる程度にまで運んだやうに覺へる。いづれにしても、私の處女作が「柴賣り子」であるのは、たしか奴之助が誰れかの「新開賣子」に因を發してゐるのを知ると共に、商賣の子としての私の歩みが、文學少年としての何ものかを具有してゐたのは、慎しいことだと思ふ。その點、別天樓先生の俳句の機縁がなかつたにしても、何ものかに衝動をうけて、同じ歩みを運んだであらうと思ふ。少年の頃の私は、兎角もの思ひに沈んだ、陰氣

なむつがり屋であつた。

俳句に遠のいた私は、いや俳句にも親しみながらさういふ方が適切だ。私は、その頃の明星派の歌をも作つてゐた。これは誰れを先生とするのでもなく、たゞ亂髮時代の晶子氏や山川登美子氏などの、女性の歌に強く惹かれて、その感化を享けてゐた同窓會の會誌に、さうした傾向の歌をズラリと並べて得意がつてゐるこ、尙に、別天樓先生の親しい注意を受けたりなさしたが、同窓會誌には一回切りで中絶したが、短歌熱も可なり強かつたのを知る。

その頃、明治卅七八年の日露戦争當時であつた。今、大阪の淀屋橋附近から發刊されてゐる關西日報は、二昔前のその頃は大阪日報と稱して、紙面も新聞一頁を二枚折りにした、小型なものであつた。が、經營上手な社長吉弘白眼氏の手腕で、赤新聞としての特異な威力を放つてゐた。その大阪日報に毎日「浪花樽」を稱した時事狂句が二十句位宛掲載されてゐた。露國といふ強國を相手として、連捷はしてゐても、日本は國家を擧げて、文字通り熱狂してゐた。そして、この敵國露西亞に對する感情が、國民の各方面に爆發して、流行歌となり、劇となり、歌となり、俳句となり、詩となり、形式を變へて熱狂してゐたのだ。「浪花樽」の時事狂句も、御多分にもれず敵國露西亞を皮肉つてゐた。

私は、その「浪花樽」を讀むと、いかにも端的に、露骨に、相手の胸へ刃を擬してゐるのを共感した。國民の一人として、

よし少年にすぎないにしても、恨み重なるロスケ奴に、少しでも胸の鬱憤を晴らしてやらうと、偶々其の「浪花樽」へ投句してみた。ハガキへ四五句書いたと思ふが、翌々朝みるに「浪花樽」の中央部に一句、私の句がのつてゐた。それは「ネボケトフ撃沈されて眼をさまし」さういふ、當時ネボケトフ將軍を皮肉つた狂句であつた。私は、投書の味は知つてゐたが、斯うまで手つ取り早く活字にされることの、一種の魅惑を感じた。活字になるさういふことは、寔に涙ぐましいまでに、少年の胸を躍らせるものだ。今でも、少年雜誌などで、漫書のくり言を書いてゐる少年を發見するに、私は活字の魅惑が此はしい氣にもなるそれは兎に角、このネボケトフの一句が縁縁となつて、それから時事狂句をはじめ出した。一句二句、時には五句も六句も自分のものが出てゐるに、何となく愉快であつたのは因果なことである。

「浪花樽」の當時の選者東夷氏は、或は佐藤紅綠氏である噂したが、その眞疑は知らない。その東夷氏の東上と共に、後任に就いたのが左叫氏で、まさしく武市南風氏であつた。「浪花樽」は、左叫氏によつて可なり句風傾向が變つたが、根本に於ては狂句の性根を忘れなかつた。が、さしもの日露戦争も、奉天の對陣を名残りに、講和の歩を進めて、時の小村大使により平和を克復した。その屈辱講和の燒討事件を名残りにして「浪花樽」もだん／＼興味を失つた。何となく、狂句の本質として、相手が大きければ、大きいほどの熱情がある。が、その對

魚の敵を失つて、だんく女學生の式部觀や、ベストの流行につれての衛生調刺になつて行つた。私は、其頃の日報歌壇や俳聖にも關係したので、早くも其の同好者達と握手することが出来た。が、一方の『浪花樽』の作家諸君とは、何の交渉も起らなかった。

が、その時分の日報社は、例の長出秋濤氏なども入社した關係上、文學熱が高かつた。なんでも日報投書家の好き者もまぜて、お伽劇團の旗擧げした。高尾楓陰氏や久松一聲氏などの音頭取りであつたのは申すまでもない。この劇團に關係して、旅行興行にまで出張した私の知己もあるのを記憶してゐるが、私は、一回ぎり相談會に出て廢して了つた。恐らく、お伽芝居として古い部に屬してゐるやう。

日報の歌壇は、今、實塚にありと聞く、久松一聲氏が選者であつた。俳壇は、不思議に私の記憶に貼つてゐない。歌壇の雄は飯田涙郎、關鐵腕、宗形蕪風の諸君であつた。涙郎君は大阪の古い歌人だが、私も久しい間交際をつけてゐた。涙郎君を通じて、その頃尾上柴舟氏の門下として、車前草社の新進歌人たる、牧水、夕暮、旺洋、芳水、露風などの、諸氏を知ることを得た。が、私の歌は、相變らず進歩もせぬ、晶子調を追ふてゐた。今、涙郎君の強度の近眼鏡さ、あの高津の八番町のお宅の、危ない段梯子を思ひ出すと、人生の一隅を痛感するやうである。關鐵腕氏は、京都在住の學生であつた。尤も、その頃には三高であつたと思ふ。何度も手紙で歌の批評を得たのを記憶

してゐる。ほんごうに、忘れ得ない人である。宗形蕪風氏は、當時西警察署に巡查を奉職してゐた。歌の會に、サーベルをがちやつかせて這入つて来て、一同を駭かしたのを知つてゐる。この人は、短歌で一家をなせる人だが、今は何う變化せられたやら、前の二君と共に、私の忘れ得ぬ人々であると共に、全く交渉もいつかはなしに無くなつてゐた。

又、『浪花樽』へ話しが戻るが、明治卅九年頃、ある初夏の日、この樽の同好者が會合した。尤も、その中には、お伽劇や、又新聞社の談話室で、お馴染になつてゐた人々もあるが、十七八人集合したと思ふ。社からは、高尾楓陰氏が代表出席して、同じく首を捻つてゐたものだ。この會合をなさしめたものは、當時の世話好き、後の幹事、中村喜月君であつた。顔ぶれで忘れぬ人々は、喜月君は勿論のこゝ、篠村力好君、小西屈突坊君、露帆君、卜城君、及び私の従兄の只英君などがある。この第一回に、故人今場常坊君が出席したか、何うかは、私の記憶にはない。が、間もなく、第何回目かを、常坊君の肝煎りで阿彌陀池の茶亭に開いて、披講半ばに轟然、ほんごうに文字通りのぐわうぜん響いた、お寺の鐘に飛び上つたことを未だに忘れ得ない。何にしる、句會の二階は、すぐ鐘に接近してゐたのだから、ほんごうに駭いた。句作三昧境さ鐘の音―その印象は取り合せ上、非常に趣味的だが、しばらく胸の速鐘と共に、句境をみだされたのをハツキリ記憶してゐる。

故人小島六厘坊は、その頃、今の都新聞の前身大阪新報に、

新報柳壇を開いてゐた。そして、六厘坊一派は、早くも川柳の形式を整へてゐた。葉柳の前身やなぎだるなぎ其の頃に發刊されてゐた。

が、前に云つた、東上した東夷氏時代から六厘坊と争端を開始してゐた。それは何んなことか因を發したのか忘れたが、六厘坊も『浪花樽』へ、東夷攻撃の狂句を寄せてゐた『東夷トンチキ變人へツボコテクレツツノバア』の句を記憶してゐる。間もなく東夷氏が去つて左叫氏が選者となつたが、早くも鋭眼な六厘坊は喜月君を通じて、日報柳壇に割り込んで来た。そして臚ろけながらも、川柳の本體を説いて、合併を強要した。そして會合にも出席するやうになつて、たうく六厘坊の威歴力は全ての人々を惹きつけて了つた。

その合併記念會は、御靈の東側、五二縮樓上であつた。この川柳會の結合は、個々の關係は別として、新聞柳壇の一大結合であつたのだ。それは、大阪新報、大阪日報は申すまでもなく日本や讀賣の投句家までが、これを契機として、遂に、大阪の川柳界なるものを形成したのであつた。

思へば久しい事だ。大阪日報は左叫氏の書いたものが榮つて遂に亡んだ。が、その大阪日報の『浪花樽』から、ミに角、大阪の川柳家を多く産出したのは、功績にしても著大なものであらう一寸數へてみても、喜月、霧帆、屈突、力好、水牛坊、只英、常坊、なぎを數へ得られる。私も亦、その一人であることは勿論だ。一方、六厘坊を活躍させた大阪新報も、西出當百氏なぎ

を掘り出したのは、大阪川柳史に特筆すべきものであるが、不思議にも大阪の川柳搖籃時代の『大阪新報』も大阪日報も、名實共に亡びて了つたのは、奇しき縁でもあらうか。そして、その時代の人々が故人となり、又は現存しても柳界から去つて行く中に、力好君等と共に、まだ柳界に惡因縁を斷ち得ない自分を見出してそこはかきなき淋しさを味はふ。

六厘坊に隨ふた人々の手に、やがて『葉柳』が郵送された。私は應募吟一句が載つてゐる感激したものだ。私は、その頃か今の半文錢を用ひ初めた。それは六厘坊にヒントを得たのは勿論であるが、その周圍の人々に、七厘坊(川上日車氏)八厘坊、當百氏なぎ。可なり錢に因縁の深い筆名があつたので、譯もなく感化されたものだ。六厘坊なぎも、初めは新報の一口嚙

に應募した時に使用した匿名であるが、いつかは川柳家としての本號になつて了つたさうだ。思ふに、六厘坊の、日本柳壇の劍花坊氏に應募してゐたのも、或は、斯うした匿名であつたのであらう。が、その匿名が遂に有名にならしめて、却つて六厘坊の本筆名である溪水なぎは、知る人がないのも滑稽である。それにしても、匿名の六厘坊からヒントを得て、改號した自分

は、當時さのみの理由もなかつたのであらうが、これも又、不用意の改號が宿命となつて、たうく他の筆名をすて了つたそれだけ、俳壇や歌壇から、影を窺つて了つたのである。葉柳を知る人は、大阪の現在の川柳界には稀であらうが、大阪の天地に、川柳らしい川柳の芽を植つけた、葉柳さ小島六

厘坊ミの功績を忘れてはならない。それは着接に關係をもたなくとも、現在の大阪調、所謂關西調は、この葉柳によつて創作されたものである。幾十年を経て、その孕まれたる素因として、葉柳は光つてゐるやう。洗練されたる關西の句風——さうしたものを史的に考へてみるのも、今の、若い人々の一つの研究資料であらう。

それは宜いとして、葉柳の句會が開かれる度に、私も末席を占めてゐた。會場は、例の五二館の大廣室であつた。これは合併記念か何にかの祝意の下に開かれたもので、六厘坊周囲の人々も、喜月君を幹事とする、私共の初對面でもあつた。今に、私の印象に深く残つてゐるのは、會場中央の席を占めてゐた西田當百氏の洋服姿であつた。日車氏の七厘坊君に初對面したのも、恐らく此の五二館樓上であつたであらう。松窓氏、故ひさご氏、ふくべ氏なども同席したと思ふ。

一方、喜月君の肝煎りで、舊日報柳壇のものが主催で（西柳櫻寺別山云々）川柳會を開くやうになつた。これには六厘坊が單獨で出席してゐた。會場は篠村力好君の宅である。堀江の繁榮橋南詰のせみや旅館がそれであつた。表の往來に接した居室で、第一回が開かれた。その席上で淺井五葉氏（當時了軒と號す）麻生路郎氏（當時天涯と號す）などにお眼にかゝることを得た。或は、それ以前に御眼にかゝつてゐたのかも知れないが、當夜の會合の印象が一番深い。それは、五葉氏の「顔中を撫で、飯粒やつみ取り」を記憶してゐるし、路郎氏の金銀の學

生姿も、ほつかりと浮き出て残つてゐる。當時の五葉氏は、讀賣紙上で可なり活躍してゐられたと覺ゆ、端然と座してゐるあのつつましいやかな五葉氏は、今日も尚ほ健在に、あの、つつまいやかさの端然味に落着いてゐられるのであらう。久しいこゝこ會はないので殊に然う思ふ。路郎氏は、初めての會合でも、今日の路郎氏を憶はずやうに、賑やかな印象を貽してゐた。人間の第一印象は、可なり其の人の性格や態度を、相手の腦裡に深く刻み込むものではある。

葉柳時代の六厘坊——云ふよりは、心齋橋北詰の洋服隊列場の六厘坊といふ方が、適切かもしれない。それはさきに心齋橋の北詰へ、吾々を惹きつけたものだ。六厘坊を訪問するに、きつ一人か二人川柳家が居るか、若し居なかつたら、今歸つた處だ、面白い咄しがある——云つた風に、六厘坊一流の豪傑笑ひをしたものだ。あの、武骨な肩を揺すつて大笑する時を思ふに、さうして彼の元氣に満々としてゐた、弾力性の六厘坊が僅かに廿二歳位で天折したのかを不可思議に思ふ。

六厘坊の思ひ出阜は多い。その人格や川柳の手腕は、今更らしく書き立てる必要もあるまい。が、六厘坊は天折するだけであつて、豪傑肌の反面に、友達としての親し味が厚かつた。人間としての征服態は酷い人だつたが、心のさん底に、涙ぐましい共感を抱かせた人だ。直ぐに大聲を揚げて、憤るが、又直ぐに和解し釋然としてゐた。理知と感情の外に、意志力の強い人でその反撥性は激情と共に、柳界の誰彼れを敵にして戰はしたの

は多くの人が知つてゐやう。でも、現在の柳井では、アンな咆哮振は見られないであらう。それだけ大阪の川柳界も、智的に磨きかゝつたのであらうが、さり連、あのやうな太い線を描く意力の人も無くなつたのであらうと思ふ。

五二館の會場で、折柄、碁盤を持ち出して烏鷲を戦はしたザル碁盤を大喝して、場外へ追ひ出したり、或は、うきん屋の手落ちで、箸を忘れて来たが、それを間に合せるまではキツネの方が冷めるので、二杯のキツネを箸なしの曲喰をして笑はせたりして、六厘坊は機に應じて人の意表に出た事を屢々演じたものだ。尤も當時はまだ廿歳を出ない頃だつたから、野性も鬚骨も五體に脈づいてゐたのであらう。日車氏の七厘坊君は、その頃ひさぎ氏と共に、市岡中學に在學中だつたと思ふ。或はその卒業前後であらう。いづれも年少氣鋭、僅に西田富百氏か、世間の味を解してゐた位で、多くはノホホンの少年が多かつた。でも、句會は何日も靜かに、そして緊張した。この釋寂味を破るのには、いつも六厘坊の豪傑笑ひと、傍若無人の話振りまであつた。

その頃の句會は、現在と大同小異であつた。多く、頂戴選をやつてゐたがせとやの會合で、封筒まはしの運座を試みたりしたのも何回もあつた。佳句を頂戴するのも、その頃は、六厘坊頂戴、半文錢頂戴なご、その筆名を冒頭に置いた。これは、その句の探點者を知るために、後の參考になつて宜いものだがいつこはなしに、現在の一、二點の制度になつた。恐らくは

その頃から出席を初めた、花岡百樹氏や渡邊虹衣氏、少し遅れて今井卯木氏等の發議によつて、筆名を冠せる頂戴は改革されたのであらう。

それから面白いのは、せとやの會合で、高點句に石鹼なごの景物があつたことだ。尤も、これも其頃の川柳家の中で、寄進したものであるが、この景物制度が暫く続いたのは、あなたが東京風の感化ではない。單に、人間も何にか張り合ひがないと、川柳に凝れないものだといふ、唯物思想の片鱗に過ぎないのだ。

それにしても、六厘坊の周圍の、松窓、日車、ふくべ、ひさご、八厘坊の諸氏は、まことに無口の、沈黙家であつたが、六厘坊獨り、しやべり散らして、句會の席上を引つ提てゐたのは何んこしても威力があつた。いつも句の上の議論の相手は、當百氏であつたが、今から思ふに當百氏も、可なり迷惑を感じたことであらう。百樹氏、故人柳珍堂、同じく故人藤村青明(當時は觀面坊三號す)なごが句會に現れて、各自の異彩を放つたものだ。又、渡邊虹衣氏も、百樹氏と共に出席されてゐた。が同氏は何うしたのか、六厘坊の周圍から忌避せられてゐたがそれでも盡々出席されて、江戸辯を聞かしてくれたものだ。尤も、百樹氏なごも、さびた聲と共に、少し含むやうな江戸辯を聞かしてくれたものだが……。そして、句會に紋付で出席したり、袴を穿いて來たり、少年の會合には珍らしく威儀を正したものだ。その頃は、當百氏の洋服姿が、和服の質素味に變つた

時分だ。

せみやの會の珍談の一つは、せみやへ泊つた客が、折節奥の室で開いてゐた句會に出席したこゝだ。たしか丸竹さいつて三十二三歳位の人だつたと思ふ。下の關から商用で來阪したのでこの丸竹さいふ人が、可成り穿つた句を作つて喝采をまくしたものだ。それ以來、この人は葉柳へも句を送つたが、今の其の所在も知る便りもない。

當時の會合者は、大抵十五六名から、廿名を二名超へる程度だ。三十名も集まるのは、新年か亦は特種の會合であつた。平在十七八名程度と思へば大差はない。句の巧であつたのは、當時の七厘坊の日車氏、故人ひさご、故人青明、故人柳珍堂、當百氏、五葉氏なきが數へられるであらう。百樹氏は古川柳そのまゝの、情趣の深い句があつたが、比較的若いものには受けなかつた。六厘坊は多作、速吟、到る處に吟懐を恣にした。何んこしても威壓的であるが、川柳の本質は、大まかであつたやうだ。これは劍花坊氏に推賞せられた所以で、彼の岩田郷左衛門氏なきと共に、大まかな日本柳壇の傾向に合致した天性を備へてゐた様である。

當時の六厘坊の周圍は、自然に其の感化を受けてゐた。が、句の傾向はそれ／＼に獨自のものを持つてゐたから、六厘坊の模倣旬なきは、餘り出なかつたやうだ。百樹氏や柳珍堂を外にして、大抵は速吟家揃ひであつた。一題の句作時間が十分制度で、多いのは二十句内外、少いのは六七句程度で、十二三句位

が一番多かつたやうに思ふ。尤も、會場には六厘坊が、自分の銀時計を出して、時間を睨みつめてゐた。時には五分位のお添へものがあつたが、その時は必ず句數の少い時で、一同が「六ケしい題やなア」ミ嘆息をもらしてゐた時に限つた。一題づゝ斯うして作つて行つて、一三晩に五六題を進行したものだ。兼題は、句會通知狀に必ず印刷されたものである。會費は十錢、茶菓の馳走、キツネの一杯、二杯は、散會前に出された。せみやで無理を云ふて、晩餐をした、めたりしたが、酒は出なかつた。新年會か又は特種の會合でなければ許されなかつた。みな少年時代であつたからであらう。

川柳會の席上で、へなぶりや情歌を初めたのも、たしかせみや時代であらう。へなぶりは讀賣への挑戦を意味するが、さて葉柳には、さうしたものは掲載されなかつた。たゞ情歌（民謠としての）が二度發表されたに止まる。尤も情歌の研究は川柳の江戸趣味の轉機にあつたのであらうが、一つは斯ういふ素因もある。それは、當時大阪で情歌の宗匠として光つてゐたのは、田中芳哉園氏であつた。たま／＼氏の社中の會合が、南地の法善寺にある二鶴で開かれた。六厘坊はひさごと共に出席して、例の豪傑肌から、たう／＼其の席邊で喧嘩をした。何分情歌の人々は相當の年功を喰つてゐるし、又、情歌の一つでもやう／＼さいふタイプに出來てゐるから、六厘坊の傍若無人さは相容れなかつたのであらう。詳しいことは知らぬが、いさゝか民謠、俗諺を詩的に解してゐた六厘坊の事だから、字句やリズム

ムやから、俗悪呼ばりをしたものらしい「この小僧生意氣な」
 ミ小癩に觸へてゐた一人が、酒の上で盃を六厘坊に打ちつけ
 た。それから立ち上つての喧嘩になつたがいくら豪傑でも、味
 方はひさご一人、遂にしたゝか鐵拳を受けた。あの河豚のやう
 な六厘坊の顔の威方も、この時は功を奏しなかつた。が、芳哉
 園氏の計らひで仲裁が成立し、芳哉園氏自身も、六厘坊の熱心
 さに促されて、川柳會へ出席するやうになつた。句會で情歌を
 作つたのも、さうした意味での、芳哉園氏への謝意でもあつた
 この時の経緯は、番傘十週年の祝賀會席上で、芳哉園氏が話さ
 れて、六厘坊の人格の一端を賞讃されたやうに思ふ。

情歌の騒動は私は見なかつたから知らないが、それに似通つ
 た逸話を私は知つてゐる。それは、前田翠溪氏の歡迎短歌會を
 難波八阪神社内の、樋口車童君の宅に開いた時であつた。そこ
 で知つたが、遅く六厘坊は出席した「私は小島魔王さいふもの
 です」なご、冒頭から人を喰つたものだが、席の中央にゐた
 私を見出して「やあー」言ひながら、ツシ、ツシ私の上座
 へ割り込んだ。そして、例の傍若無人振りを發揮したのだから
 當時の若いセンチメンタルな歌人を壓迫してゐたのは當然だ。

歌の批評が初まつて、可なり歌人として知られた人も出席し
 てゐたのだが、短歌の集められたものを「私が批評します」ミ
 驚瀾みにしたものだ。随分高飛車ミ云へば高飛車ではあるが、
 當夜の幹事や、先輩の人々や、殊に當の主人公の前田氏に對し
 ても、まことに吾儘を發揮したものだミ、私は内心ハラハラミ
 した。が、委細おかまひなしで、質疑もやれば痛烈な批評もし

た。何んでも、前田氏の歌に「葉づれの風」ミいふ文字があつ
 たのを、葉づれミは變だ、古語やなんかを持ち出して、悪評を
 したものだ。温厚の君子前田氏初め、當時の歌人は皆柔順しか
 つたから宜いものゝ、これが前述した、情歌の好き者にみるや
 うな、傳法肌の人が混つてゐたら、或は當夜の六厘坊も、又袋
 叩きに遭つたかも知れない。初めて出席した會場で、斯ういふ
 野性を發揮するのは、恐らく現代の人々では不可能のこゝであ
 らう。尤も、その當時でも六厘坊の外は、所詮は不可能の事に
 は屬してゐるが……。

六厘坊の冒險性は斯ういふころにあつた。が、争ふたり、
 痛烈な批評を加へたりする點は、口も八丁、手も八丁であつた
 才氣横溢、赴くころをして天分を發揮したものである。多
 技多才、そのいづれにも情熱を傾けたが、さうした詩人肌は、
 この一代の天才兒であり、熱狂兒であらしめた六厘坊をして遂
 に天折せしめたのであらう。しばらく魚崎の方へ、療養に出て
 ゐるが、間もなく大阪へ歸つて、今の十合呉服店の向ひ側で、
 句會を催したりしてゐたが、遂に不歸の人ミなつてしまつた。
 小島一族の人々を思ふミ、今にして暗涙を催されるのでもある

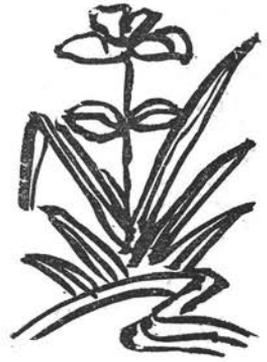
六厘坊は、大きな聲であつた。會場の外から、子供が眞似て
 「六厘坊テウーダイ」なご、笑はせたこゝもあつたが、その時
 は顔の相格を崩して鬚髯笑ひをした。六厘坊の威力は、選句の
 上に及ぼした。私なごも、六七百句の中で、ほんの五六句しか
 採點してくれない時もあつて、その暴力を寧ろ不愉快に思つた
 位だ。だが、斯うして手厳しい鞭をくれて於ては、ノコくミ

夜分に訪ねて来て、私の機嫌直しをしてくれたこともある。これは敢て私一人が厳しい鞭をうけたのではなくて、その周囲の人々は同じ運命にあつたのだ。葉柳なきへは、なかく句を採つてくれない。文章なきも、さうしても載せてくれなかつた。これは現在の川柳界のやうに、直ぐ選者にされたり、又愚文でも採用してくれたり、するのには隔世の感がある。尤も、斯うした厳しい鞭に育てられたので、おかげで川柳の試作に、十分の練磨をなし遂げた様に思ふ。彼れ六厘坊の周囲から、日車、松窓、當百、柳珍堂、ひさご、青明、五葉、路郎、水平坊の諸君を誕生せしめたのであるから、その年少氣鋭の反面に、たしかに大きなものが握られてゐたものであらう。現在の、選者になつたがる人々の多いのをみて、私は、故人の偉大さを必々思ふ。今の先輩や大家には、あの壓力がない。路郎氏が少し系統を引いてゐるが、やはり線は細いのを免れぬ。松窓氏には、押し出しの壓力はあるが、無口の方で性格が違ふやうだ。日車氏は、人間としての親し味が多くて、會場での壓力はない。五葉氏又温厚の人格者で六厘坊の衣鉢を承けてゐない。隠退した當百氏も、年功の上で威壓したが、やはり六厘坊三畑は違ふ。惜いのは故人青明だ。彼れには六厘坊の意志の強さはないにしても、さうかに會場を壓する力が潛んでゐた。よし、新川柳としての先驅者であるこゝを引き離しても、青明には一脈の威力があつた。切めて青明をして、今日まで生かさしめたいと思ふのはあながち神戸柳界の欲望のみではない。彼は確かに、ある點で六厘坊を襲ふてゐたであらうと思ふ。私は、柳珍堂の死も

嘆かれるけれど、青明三ひさごの死ほど、痛惜せられるものはない。確に、この兩人は、今の日車氏三其の作句に於て、首位を争ふてゐたであらうと思ふ。既に其の當時から出色の作家であつた事は申すまでもない。

葉柳時代の私は、いつも中以下に位してゐた。私の周囲の只英君や、赤ん坊君からも、確かに劣つてゐた。けれども、南部で開く會合は、私が主催してゐた。一脈六厘坊の暴力のみが與へられたのかもしれない。一夜、今宮の海泉寺に句會を開いたところ、三十人近くも出席者があつたので、六厘坊が大變に悦んでゐたのを記憶する。その席上へは、六厘坊三日車氏三二人本部から代表して出席した様だつた。この會合の多人數であつたのは、私を知る俳人三歌人が多く出席してくれたのであつたが、一面には日報柳壇の出身者を狩集めた關係もある。中村喜月君の、隠れた努力であるこゝは申すまでもない。

だが、私自身は、その頃計畫した渡米の素志が、年齢の關係で果さなかつたので、少々少年らしい自棄に陥つてゐた。それに性的衝動も比較的早熟だつたので、川柳に不熱心の時代が來た。むろん、歌も俳句も、川柳を不熱心になる前に棄てた。その前後に、六厘坊の死に會し、葉柳の廢刊に際して、屑川柳を棄てたものだ。當時名古屋へ行つてゐた日車氏のハガキに「不生産な川柳をすて、お互にもつゝ商賣に勉強しやう」といふ意味が認めてあつたのを記憶する。それ以來、日車氏や松窓氏も、音信不通になつて、私も斷然三川柳をすて、商賣の方へ身を入れてゐた。それは明治四十二年頃だと思ふ。



唐柳短解

蛭子省 二

(二二) 金銀を置いて、桂馬を關羽に

(十三篇)

曹操曰く御邊の馬何にこし瘦せ衰わたる
關羽曰く某肥へて身重く如何なる馬も
瘦す曹操左右に命じて一匹の馬を引出さ
せけるが、全身の毛火よりも赤く眼は鑿
鈴の如くなり、御邊此馬を知れりや、關
羽申けるは呂布が騎りたる赤兔馬ならず
や、關羽再拜して恩を謝す、曹操心の中
に怒つて申けるは、我さきに金銀美女を
與へしに御邊再拜せず、何ぞ人を賤め畜
類を貴べる、關羽曰く此馬は千里の駿足
幸に下賜さる、若し劉皇叔の行衛を知ら
ば馳のかむ

(二三) 三十里行く絶妙の知恵、ほめ

黃絹幼女三十里手を絹ませ

魏武嘗過曹娥碑下、楊修從、碑背上題作
黃絹幼婦外孫譚曰八字、魏武問修解否、
答曰解、魏武曰、卿未可言、待我思之行
三十里、魏武曰、吾已得、令修別記所知
修曰、黃絹色絲也、于字爲絕、幼婦少女
也、于字爲妙、外孫女子也、于字爲好、
譚曰受辛也、于字爲辭、所謂絕妙好辭也
魏武之記與修同、歎曰、我才不及卿、乃
覺三十里

(二四) 李夫人を傾城にする李延年

(三十九篇里松)

延年は漢の中山の人、女弟幸を得て李天
人と稱す、延年美音起舞して北方有佳人
絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、
寧不知傾城與傾國、佳人難再得、武帝之

れを召す、夫人若くして死す、帝思ひ餘
り甘泉宮に圖畫す。

(二五) 讀賣のやうに見てゆく朱實臣、
朱實臣ちよつゝ人に突當り

(十六篇)

漢書の列傳に朱實臣字翁子、吳人也、家
貧好讀書、擔東薪行且誦書、其妻亦負戴
相隨、數々止買臣母歌謠道中、買臣愈益
疾歌、其妻羞之、幸去、買臣曰我年五十
當富貴、妻怒曰如公等、終餓死溝中耳、
遂去、後買臣詣闕上書、武帝召見說春秋
言楚詞、帝甚悅之、拜會稽太守、買臣入
吳界、見其故妻、妻夫治道、呼令後車、
載其夫妻、到太守舍、給食之居一月、妻
目經死

十訓抄、源平盛衰記、唐物語等も見られ
度し。

(二六) 水姓の字をくり出して孔子つけ

(二十五篇)

孔子家語に孔子娶於宋之尹官氏、一歳而
生伯魚、魚之生也、魯昭公以鯉魚、賜孔
子榮君之昵、故因以名曰鯉、而字伯魚

(二七) 長いいきすれば愧多し賀の無筆
莊子に富則多事、壽則多辱

(二八) 撰り出してみれば踊子七十二

三千のうちにくされた儒者もあり

(三十四篇是樂)

孔子家語に、弟子三千人、身通六藝者七十二人

(二九)越王がよひだ文毅猫がひき

唐の詩番看屋だ入れてやれ

看屋も釣師も唐の軍師なり

看屋の助言さうふ、吳に勝たせ

打かぎではんれい家をおつ拂ひ

牢番の目を貫き魚のゑらをぬき

(四十二篇錦鳥)

陶朱公前かた河岸で見た男

范蠡が出やむと將棋負になり

范蠡が腰に紫檀の御門札

(三十八篇十松)

陶朱公見切て錢をつなぐなり

(四十三篇丸龍)

勝遊びの元祖は五湖に遊ぶなり

(十五篇)

越王勾踐は會稽山に破れ、吳の軍門に降

つて姑蘇城に送られ扭械を入れて土の牢

に歲月を送る身もなつた、太平記卷四に

「去程に范蠡越の國に在りて、此の事を

聞くに恨み骨髄に徹りて忍びがたし、哀

如何なる事をもして、越王の命を助け本

國に歸り給へかし、諸共に謀を廻らし

て會稽山の耻を雪めん、肺肝を碎きて思

ひければ、身を賣し形を替へ、實に魚を

入れて自ら是を荷ひ、魚を賣る商人の真

似をして吳國へぞ行きたりける、姑蘇城

の邊にやすらひて、勾踐のおはする處を

問ひければ、或人委しく教へ知らせけり

范蠡嬉しく思ひて、彼の獄の邊に行きた

りけれども、禁門警固隙なかりければ、

一行の書を魚の腹の中に收めて獄の中へ

ぞ擲け入れける、勾踐奇しく覺て魚の

腹を開きて見給へば

西伯囚爰里 重耳走翟

皆以爲王霸 莫死許敵

ミぞ書きたりける、筆の勢ひ文章の體、

まがふべくもなき范蠡がわざなりと見給

ひければ、彼未だ憂世にながらへて我が

ために肺肝を盡しけり、其志のほご

哀にも又たのもしく覺ねける」

斯く君臣の協力に因つて遂に吳を滅し越

の天下をなした、范蠡の功名大に顯るに

つれ、姓名をかくし扁舟五湖に泛ぶ、鷗

夷子皮と號し、齋に之き陶朱公と稱し巨

萬の財を重ねた、徐州光賢傳に「勾踐吳

を滅し范蠡に謂て曰く、吾將に子と國を

分ち而て之れを有たんす、范蠡曰く君

は命を行ひ、臣は意を行はんす、乃ち

扁舟に乗じて五湖に浮び遂に返らず」ミ

足もこのあかるいうちに陶朱公

(三十九篇如雀)

足元のあかるい内に子房にけ

(十六篇)

此種の類似句は可なりある。

かながしら看實にも恥ぬ忠

看屋にまさる日本の煙草賣

和漢の忠義たばこ賣看實

(三十四篇柳雨)

忠臣藏ミ持出した和國自慢である。

(三〇)聖人のへこむはつふり許りなり

史記孔子世家「生而首上頂」頂上がく

ほむでをられたのである。

▲附記 (二三)羊泥棒の句を説明した父

は子の爲に隠しを應用せし句は随分多い

内に馬鹿けたのは三十五篇香貞作

親は子のために隠して後家はらみ
(二五)と(一六)に論語の郷黨篇を引きし
が

郷黨の篇から質を讀はじめ
で川柳家は多分にねらつて居る
江戸染の色不可なりとのたまはく
(三十九篇三交)

「君子不以紺○飾、紅紫は以て褻の服

子規と六厘坊

万よし生

路郎先生

六厘坊忌であなたの讀まれたあの若き
天才の病中日記を聞かされてから妙に頭
に残つて自分の意憤が深刻に叱られるや
うな気分を續けました。
處へ昨日高麗橋のビール會社へ行く用件
の序に白木屋で開催中の名士筆蹟展覽會
で子規の病中日記を見付けて子規と六厘
坊とを比較して見たくなりました。
勿論會場には、私が昔から崇拜せる逍遙
露伴、樗牛からなつかしき桂月、線雨な
ごも見ました。
大抵は消息文ばかりにて線雨の正大夫と

こなさず」紅紫色は女の着る服に近い
から、これを私服としなかつた。
喰物の小言も孔子いつて置き
(二十六篇兩讀)

聖人は食養生がやかましかつた、一例「
食の饑して〇し魚の饑して肉敗るるは食
せず、色悪きは食せず臭悪きは食せず、
銘を打つてあつたのも中學時代の思ひ出
を深からしめた。樗牛の一筆も忽にしな
い筆に大家の面影も惚げられました。併し
子規の病中日記が全部楷書で一畫一字整
然と原稿七十何枚が並べてあるではあり
ませぬか、この努力の結晶に氣を引かさ
れて第一頁の題字から讀みかけたのが其
眞剣さに引づられて一頁一頁「勿論私の
外に學生らしい二人が後ミ先に讀んで行
つてるのに力を得てついに一時間足らず
で通讀しました。も一度藤公山縣公川上
操六を一巡して冷たい茶で敷島の一平平
けて歸らうとしたが待て暫し三十日迄の
會期もう再び見得べくもあらず、更に三
十分を費して要所を摘讀しました。

任を失へるは食せず、時ならざれば食せ
ず割不正不食、不得其醬不食」こか不
食、食不語なごは自分も實行してゐる。
——明治四十年頃早大圖書館の坪内博士
藏書印ある柳樺及岐社文庫館の武玉川を寫
せし冊子出づ一部を残して悉く燒棄す眼
あつきを覺ゆ、六月五日鈴蘭枯る——

日記そのものは印刷にされてあるのは嘗
て見たことあるし月並の讀書子として
は特別の出来事としてでなく日記の三行
を費す位なものです、不折の子規病床
の圖に鳴書、碧氏の句が前置にしたこと
から筆を下せば即ち人の胸を打つ名文と
なつた瞬間々々が手に取るやうに知れる
ではありませぬか。實はアルス社の子規
全集を注文しやうかと思ふに際だつた
ので尙引き付けられたことあります
しみみ感じたことは構造の秀逸でも着
想の奇矯でもなく子規の文字規の句は眞
實そのもので眞善善之、善者美之、眞實
のみがよく萬生に生きる道であることを
教けて呉れます。それにしても死後二十

歳を超つて十五卷の全集を残した千規の偉大を思ふよりこの原稿が整然と残つた子規の死後の幸福を羨望の一こしします。天才六厘坊の句集すら出すに困難な事情と比較すれば古い詞ながら感慨無量ですな

▲遅日莊柳談會

- ◇日時 七月十一日午後一時から十時まで
- ◇場所 阪神沿線鳴尾 麻生路郎方
- ◇批評吟 一句持參のこと
- ◇會費 不要

出来なければ六厘坊拔萃でも發表せねばならぬのは當百、松窓、路郎ばかりの責任でなくわれ々川柳家——註川柳宗といふ言葉の定義を價值づける評論を書いて見たいと思ふてますが——の責はだに信じます。

一面に於て「おれは偉くないのだから偉くしてくれな」さか一年に一句も作らずして『川柳から遠ざかつては居らぬ』

こかいふ今の川柳家ではいつまでもあなたの澁面は直る日あるべからずです。私は川柳は知るこゝにあらすして感ずるこゝ味ふこゝでありもつゝ強めて言へば行ふこゝである信じます。このこゝについて来月の『新戎橋より』へ書きたいと思ふてゐました。今日雨で何か書きたいと思ひましたが纏らぬのでこの消息をあなたへ書いて聊か春雨消閑の記として自ら慰めます。

附記 賣り上げが雨で少いのを展覽會の穴埋で子規全集の注文は中止しましたいづれ一日に會います。くるくろミ毛布に巻かれ子は寝たりいで服にかゝて店番に行かん

(五月廿九日)

いそがぬ旅

龜井花童子

拜啓 未だ伊香保の湯に浸つて居ります。

伊香保は上野から約五時間で參られます

山の中腹にあつて人口約二千。澁川驛から電車で一時間登りの爲めカーブの箇所が六十一數へて見るも一興です。伊香保の町から榛名湖まで約二里。昨日の日曜の晴天を幸に姪三人で乗馬で往復致しました。途中は一面のツツジの眞つ盛りです。湖水から榛名神社迄十五丁です。思ひ付いたまゝ左に黙吟をお目にかけて御笑ひ下さい。

榛名を登りつゝ、榛名から見ても濠間は湯氣を出し天神峠を通過つて山賊が出るこゝは見ぬ峠なり 榛名神社へ參詣して 門番のやうに鉾岩座を構へ 湯治のお交際をして 手仕事もなく四五度も湯に浸り 喰ふ事に追われて腹の減らぬ愚痴 隣室の三味に邪魔されて作句を止めました。

明廿二日に歸京廿七日の急行で、歸國致します。途中仙臺へ寄つて廿九日正午に歸宅の豫定です。

奥様へくれぐれもよろしく願ひ升 六月廿一日主幹宛

柳談會餘滴

第四回 遲日莊主人

柳談會で話されたことを根氣よく書き續けたなら、本誌一冊を柳談會報にあてゝも足りないであらう。そこに柳談會は柳談會としての價値があるのではござん

うに柳談會の面白さを知らうと思へば、よしや道は遠からうとも自分でテクテクやつて來なければ仕方があるまい。寝轉んでラヂオで聞けないかつて！そんな贅澤を言つてはいけない。

柳談會は句會の時のやうに、きつちりさ並ばない。何處かの隅から話出される一人の話に謹聴してゐる時には、みんながその方を向いてゐる。お互ひ同士で論じ合つてゐる時には三組にも四組にも話があつてゐる。夢のやうな話をしてゐる人々、詩に對する討議、社會の實際間

題、それはその時その時の空氣によつて何が話されるかは判らない。

出席者

ひろし(大阪)松郎(大阪)刀三(大阪)島行(豊中)美の作(大阪)万よし(大阪)英豆(西宮)飯山(大阪)、二柳子(大阪)卯之助(大阪)悟郎(大阪)、三笑(大阪)紋太(神戸)東洋鬼(神戸)、葎乃女(鳴尾)、路郎(鳴尾)十三日(雨)の柳談會は、アニマリズムなKの性格論に火蓋を切つた。

これは實際問題が性格研究の資料にされたまで、絶対に個人的非難を加へた譯ではない。それから美の作が東都柳壇の大家K氏についていろいろなことを話してくれた。多少耳新しく感じた人もあつたであらうと思ふ。絶えず、いろいろな話が交換されてゐるうちに纏まつた話もなつたのが、美の作の體験的怪奇談と萬よしの「こつくりさん」に就いての口撃談であつた。それから引き續きいろいろな人々の口から妖怪めいた話が話されたがこの問題は、果てしがつかないので他日その

みを談ずるこゝとして話を打ち切つた。美の作とその従弟が體験した妖怪と自身の體験した妖怪が殆んど共通な點があつたのは興味が深かつた。僕には、

暑中見舞の

廣告を募る

◇奮て申込まれたし◇
柳友交誼のため左の便法を設く。

◆一口 金五拾錢 【二頁の十】
幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金五圓。一口分の原稿はなるべく簡単に願ひます。

◇申込期限七月十日迄【八月號】

大阪市港區八條通二丁目十一番地
事務所 川柳雜誌社
振替穴販七五〇五〇番

もつと艶つぽいのがあつた、それはこの次の妖怪談でもやる時まで續つておくことにせう。話術の巧な美の作は、妖怪談で、すつかり皆を脅かしてしまつた。郊外を少し歩かねばならぬ馬行君の夜遊びが柳談會以後すつと減つてしまつたらし

い。編輯の日に今日は早く片づけませう
 ミ類に歸りを忙いでゐるので何か用でも
 あるのかミ聞けば、實はあれから一寸怖
 いのです云ふてゐるが怖がつてゐるの
 は馬行一人ではないらしい。

話題を轉じる事にした。美の作が「湖
 の話」をした。なか／＼面白くもあり、
 有益でもあつた。それから僕が、「川柳
 雜誌社」の川柳認こいふこゝについて話
 した。あれは川柳であるこか、ないこか
 他の柳誌で絶えず論議されたり非難され
 たりしてゐるが「川柳雜誌」では、ぎの
 點までを川柳として觀てゐるかといふや
 うなこゝを話した。
 それから川柳の連作といふこゝについて
 も話した。

夜になつてから、持寄りの一句を出して
 批評し合つた。作句者の名を發表してお
 いて忌憚なき批評に移つたこゝは前回通
 りである。一句々々に加へられた批評の
 一端でも發表し得られるこゝ、遠隔の地の

讀者にもよろこんで貰へるこゝは思ふけれ
 ども今のこゝころ、それをするだけの誌面
 がない。それが實現は今暫く待つていた
 だきたいその夜、持寄り句を列記するこ
 羅布を子の無い夫婦見て歩き
 失禮々々で今日も暮れるか
 欠伸してゐる幸福へ誰か来る
 度し難し鼻のあたりが度し難し
 天主閣尺程右へ倒けて見ぬ
 發車してまた五月雨の窓をしめ
 蝙蝠もまばらに出づる鬼こつこ
 テーブルの薄明りもの映る影
 殺すなら殺せさいつた日に孕み
 叱つて出た事を忘れて歸り来る
 鈴をふりふりだいの戀が訪る
 鼻筋の通つた父の貧乏性
 飲む丈で此處に遅く成ませうか
 中の島今は散歩に來る所
 手紙を書いて山を降りぬ
 句評は十一時まで續いた。

柳談會がすんでから、いろんな手紙を呉
 れる人が多くなつた。その手紙の中には
 川柳に對する熱が横溢してゐる。嬉しさ
 の極みである。今回は私の病中で大變失
 禮しました。私の代りに美の作が快辯を
 ふるつて會を緊張させてくれたのでうれ

- 美の作 刀三 東洋鬼 紋太 万よし 飯山 二柳子 飯山 松豆郎 馬笑 三郎 馬笑 悟郎 路郎

しかつた。私は九日に病臥してまだ床を
 離れるこゝが出来ない。段々身體の無理
 が利かなくなつたこゝを悟つた。
 (床の中にて二十二日)



清涼飲料
 朝日ビール
 アサヒビール
 7

募

集

句

職人

森東魚選

拜殿を大工は別な拜みやう 万よし
 表彰の答辭老職工は泣き濁水
 わが事のやうに庭師は石を響め 利劍坊
 職人の晝の手すきに盤が出来 案山子
 腹からの職人でない愚痴になり 抜天
 仕事場に四五人轉ぶ晝休み 早苗
 職人ご名のつく迄の汗をかき 志郎
 職人のその子職人きらひなり 一文子
 職人ごあつて頭は角なもの 桃劍
 職人の子には惜しいご家王言ひ 柴光
 月初め職人兎角いゝ氣前 江柳
 又かゝご云ふ先貸しは腕が立ち 松山
 職人に流石はご云ふ智恵があり 千鳥
 職人ご言ふ根性が蓄へず 無心
 晝休み大工は鑿で髭を剃り 天花
 釘を吐き出して大工はお茶を呑 同
 惜しい腕持つ職人に酒があり 三次
 名前丈け書いて職人腕は冴ね 同
 餅は餅屋ご職人褒められる 山月
 職長が来るご仕事の音をさせ 同

總領は大工で親の後を繼ぎ 窓翠
 職人の氣質損だご思へごも 同
 椅子席へ職人ごいふ座りやう 大夢子
 紋付を看ても 職人は 職人 同
 二三人職人らしう酔うて居り 史朗
 陳列の中の大工を可笑がり 同
 職人へ職人らしい連れが来る のほろ
 片付ける職人軽い唄になり 同
 インパネス着て職人の別な顔 柳秀
 職人の子で紋長を押し通し 同
 職人の馬屁にならない金を貯め 白蝶
 職人に思ひもかけぬ趣味があり 同
 腹掛の中へ麻裏入れて行き ト水
 職人は濡手を鉋屑で拭き 同
 竹筥でならば一ツばし大工書き 同
 職人はうんごソースをほける 山雨樓
 職人がむかつかつてゐる黙りやう 同
 鉢巻をして職人は生きて来る 同
 職人の何を云ふたか皆笑ひ 吐露樓
 くだびれた職人の眼に掛時計 同

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬行生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
 (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
 好きなタイプ的女 (九) 自信の句 (一〇) 川
 柳以外の趣味 (一一) 配過者の有無 (一二) 嫌
 ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(87) 森田 一 二

(一) 森田一二 (二) 森の家 (三) なし (四) 名
 古屋市西區上名古屋町内江八二 (五) 明治
 二十五年十月九日生 (六) 鐵道局書記 (七)
 社會層の一細胞であるご同時に全體であ
 る句 (八) 調和ご云ふ事を心得てゐる女
 (九) 「新生」以後のものは大抵良心に恥ぢ
 ないが最近のものごしては一屋上に鞭が
 死んでるビルヂング」である (一〇) 讀書
 演劇(研究劇團のもの、例へば築地小劇場
 等)、映畫(特に獨佛のもの)以上は趣味ご云
 ふよりも生活の必要素である (一一) 有 (一
 二) 主張を持たない人間、流行を凡て
 進化ご心得てる男女、没常識な愛國主
 義者 (一三) 大正の初期頃だが其頃のもの
 は玩具であつたから乘てゝ了つた。だか
 ら川柳學への新入門は大正拾一年六月「
 新生」創刊の時である。

(88) 檜山千代二

静けさを覗けば塗師屋一人ある 同
職人の一人うたへば又うたひ 同 路
職人の一人朝鮮通にして 同
極道をしたを職人味僧に云ひ 同
作事場へ過ぎた女が曾ひに来る 同
作事小屋首をぢめる雨がもり 美の作
庭下駄で突火に旦那話込み 同

僧

山門を出て老僧は春さ知り 杏三
極樂はこんなさだま僧の智慧 吐露樓
讀經を只々嬉しいものにする 琴香
老僧の肩枯草の様に 紫光
御寄進に和尚の辯のよく廻り 突支坊
合トンビ着て大勝に歩く僧 大夢子
極樂へ行けさうな經僧は讀み 千鳥
テノールも解する程の僧にして 殘紅
托鉢の僧の一人は外で待ち 柳秀
引導を授ける僧のきらびやか 七五三二
雪の日を選んだやうに僧は立ち 万よし
酒の座の酒豪の僧は世にくだり 白蝶
住職に金が溜つてにくまれる 利劍坊
口に入る男へ尼僧暇を出し 濁水
愚僧にもそんな怒あり瀧の音 眠聲
満員車僧も少しは押して乗り 拔天
經を讀む僧に團扇の風が来る 早苗

一こつかみ含むさ大工無言なり 同
割引車今朝は素面な熊に逢ひ 同
歳暮札植木屋からの早い春 同
陽炎に石屋のさかな音をたて 同
温室をもつ植木屋で歌を詠み 同
(軸手工室大工の伴はしやど来 東魚
猿はものかはふいご場の足 同)

矢田右大臣選

番僧の箒そのまゝ禮を云ひ 鮎美
住職の髭ちむさく延びてゐる 山雨樓
自他共に許す和尚の飲める口 同
三回忌僧を歸へして皆な酔ひ 史期
僧一人ごはんに更けた事を知る 同
旅僧へ行商何か話しかけ 同
自動車を見て旅僧の歩くだけ 同
紫で来る僧侶はありがたし 憲翠
有難く思はせる僧眼をつぶり 同
僧一人山からつゝじ持つて下り 同
(佳)托鉢の僧は着替へて草履も 柳秀
通夜の僧案外世事にうごからず 万よし
葬列の僧暗緞を色に見せ 白蝶
親戚の名義で僧も株を買ひ 拔天
焼香に僧は検使の躰で座し 濁水
お茶を出してもお寺さんは拜せ 同
村の子を集めて僧の老いにけり 史朗

(一)檜山茂樹(二)千代二(三)無し(四)東京麴町區有樂町一の三日比谷ビル日本營養協會(五)明治三十五年三月十日生(六)最下級員(七)主觀的な句(八年増か女學生(九)作り得ず(一〇)野球、映畫等(一一)なし(一二)不明(一三)夢路さんの「はこやなぎ」頃

(89) 熊本博久

(一)熊本爲四郎(二)博久(三)なし(前名は廣賀)(四)大阪市住吉區平野梅ヶ枝町五丁目二九番地(五)明治三十一年七月一日生(六)西洋洗濯業(七)賣られたは三味線に手の届く頃(八)水府(九)あまり日粉氣のない美ふて愛のある顔、ごちらかさ云ふさ肥つた女、妻は人並より細い方なれ共(九)落し差し十手が横に歩かせる(一〇)かると、角力、五目剣(一一)有(一二)蛇、借つて来たやうな女の洋装、酔ふた人、借金(一三)大正十三年十月頃

(90) 船井小阿彌

(一)船井勝太郎(二)小阿彌(三)うさぎ川柳さ一中節以外には鏡湖の號を用ひる事もあります(四)東京市日本橋區小網町四の二(五)明治二十四年七月八日生(六)祖父の代より蕎麥商なれど餘技が多過ぎて時々御本職はさ質問されます(七)「三味線を夢に折られた切れ小口」古蝶(八)酒も少しはいけて話上手な無論下町風の女

田植笠僧は平和な村に
(人)御燈を守りて僧の老ひに
鮎美

齒 醫 者

◇ 松 雨

口あじたまへて齒醫者へ返事
此顔へ金齒に齒醫者思へごも
よう羊棒したご齒醫者は抜見
片頬を押へ齒醫者の遅いこ
齒醫者へは親の甘さ文け通ひ
人の氣も知らず齒醫者は若の
笑ひ泣きさせて齒醫者は禮受
今治水一寸齒醫者のまねをする
父さんの人齒に齒醫者草臥れる
はらへご齒醫者の手の早さ
泣らちる痛さを齒醫者知らぬ風
齒醫者から出る五六度無駄噛み
よからうご思へご齒醫者つめ
親不知齒醫者の腕にすぎりつき
金巻いた晩の齒醫者は呑居り
西向きに齒醫者は口を明けさ
齒醫者も顔を歪めたまんま来る
あツさりご抜いて齒醫者は譯
アーンご齒醫者は範を示して
漫講から抜け出た様齒醫者云
なんほも出来ませすしか齒醫者
齒醫者へ行かうご妻の小半年
胃の悪い事も齒醫者へ申添へ
齒醫者を行く母親の背で泣き

選 聞 路 一 文 字 山 月 早 苗 利 劍 坊 濁 水 郊 村 柳 秀 白 灣 無 心 天 花 突 支 坊 殘 紅 史 期 同 翠 同 天 同 万 好 同 吐 露 樓 同

西 垣 松 雨 共 選

(地)托鉢に續く僧侶の雨に濡れ
(天)山を出た僧侶の灯を浴びる
口すくぐひまを齒醫者は別な用
妙な咳してて齒醫者氣にか
スリツバの音も齒醫者の忙しさ
齒醫者父外の道具の音をさせ
齒醫者には馬鹿と面ごしか見

雅 幽 選

齒醫者から歸つて何も食へぬ
齒醫者へ行かうご妻の小半年
齒醫者出るご五六度無駄噛み
勘定に齒醫者治療の分をまけ
おついでご齒醫者人齒をて居
義齒の值齒醫者商人らしく言ひ
明日詰めて呉れる金齒を見せ
あツさりご抜く齒醫者は譯を言
醫術より技術がうまい齒醫者
此の顔へ金齒に齒醫者思へごも
胃の悪い事も齒醫者へ申添へ
齒醫者を行く母親の背で泣き
口すくぐひまの齒醫者は別な用
妙な咳してて齒醫者氣にか
スリツバの音も齒醫者の忙しさ
齒醫者父外の道具の音をさせ
齒醫者馬鹿けた面ごしか見
齒醫者から出て唾を吐き

史 朗 白 蝶 同 山 雨 樓 同 同 同 吐 露 樓 同 一 文 字 憲 翠 史 郎 殘 紅 眠 聲 利 劍 坊 天 花 万 好 千 鳥 同 山 雨 樓 同 同 同 山 雨 樓 同 同 同 雅 幽

(九)まだなし(一〇)酒、女、芝居、落語
邦樂、目下は一中節病にさりつかれて居
ます(一一)有(一二)鹽辛、みつ糞(一三)
明治三十七年日露戦争當時。

(91) 大 山 露 斗

(一)大山勇雄(二)露斗(三)無し(四)廣島
市舟人岡四丁目一三五(五)明治三十五年
五月廿二日生(六)目下店員(七)松郎、馬
行氏の句、特に松郎氏の洒落氣味の句、
路郎氏の「母の背で寝る朝鮮人の子よ」

(八)軽さうで温順な無口の女(九)仲々作
れません困つて居ます(一〇)浪花節、映
畫(一一)なし(一二)友情にうすい人(一
三)大正拾四年春頃大阪日日柳壇がはじ
め。

(92) 酒 井 駒 人

(一)酒井肇(二)駒人(三)なし(四)千葉縣
四内道町小池商店方(叔父さんの家です)
(五)明治三十一年拾一月三日生(六)製菓
業七助六氏所有の短冊の「引さめて新茶
を入れる暮し向き路郎」の句が好きです
(八)毒婦型、澤村源之助文のお富のやう
な(九)まだありません(一〇)落語、芝居
角力、旅行(一一)今話中大低きまる管(一
二)煙草世辭を云ふ人、七三三耳隠し、
斷髪に洋装(一三)大正拾年頃講談世界へ
投句したのが初めです。

各地柳 松 郎 編

万よし川柳 (第廿六回)

「皮肉」 林出馬行氏選

皮肉輕う残り集金人歸り 屏三呂
 見せしめか課長う喜んで晝がま 悪 翠
 永い眼で見て居りますは皮肉が いさむ
 四匁で足らぬ皮肉な手紙が來 三 笑
 皮肉が過ぎて不仲さはなり 山雨樓
 算盤が濟むさ皮肉を云ひ返し 飯山
 皮肉斗り云ふて仕事を溜めて。 同
 (人)皮肉なごさつかへ忘れ病 屏三呂
 (地)落ちて着いた皮肉鎗背へ聞き 大夢子
 (天)その皮肉感心をする第三者 飯山
 (軸)皮肉云ふ癖も儘におちぶき 馬行
 次回題「若盛り」五句 淺井五葉氏選
 七月二十日締切
 大阪市區區新或橋南詰万よし宛
 安治川小集 (六月十六日夜)
 飯山 報
 裏町の火事に消防少し焦れ 越浪
 仲仕又倉庫の中でぼたわて居 同
 倉庫から馬力が續くいい日和 一文字
 金のない奴を山賊たゞき出し 同

萬よし偶會 (一)

萬よし 報

山賊は飯を炊くのをうるさがり 酒水
 寄集めもので山賊酒を呑み 同
 倉庫から事務室までの雨にぬれ 飯山
 倉庫から出て來た荷主手を洗ひ 同
 道のないごこを山賊逃けてゆき 同
 火の始末せずに山賊いてしまひ 同
 山塞へ残念ながら案内し 同
 失戀の俺に淋しく蚊が泣いて 三 笑
 名物にうまいものなし蚊に 同
 獨酌の銚子で追ふた蚊のうなり 放馬
 蚊があるなごさしぶきの中に立ち 同
 泣らぬ蚊やなご妾宅へお越し 塊人
 泣くなごさ右の手の團扇 同
 蚊一匹居ないごこから寺をほめ 万よし
 大仰に蚊を叩いてる上機嫌 同

眠聲居小集 (六月十三日)

眠聲 報

上かん屋客が居ります足が見ぬ 案山子
 植木屋の夜店の雨に逃げもせず 同
 一升はらご無理だご眼がすわり 同

萬よし偶會 (二)

万よし 報

眼をかけてやつただけ尙可愛 同
 辻占の哀れな聲を買つてやり 同
 上欄屋さきのお客の癖を云ひ 鮎美
 夜店から戻るごさぐに出見せ 同
 眼の玉の黒い間の地獄なり 同
 辻占の諦めよごは何事ぞ 同
 上かん屋まづは親爺のお酌にて 緋紗子
 藏ひまほごかご去ぬ夜店 同
 眼千兩ごさはれた頃が嘘のやう 同
 笑つてもごさはる悲しい腫なり 同
 上かん屋リンもすぎたで戸を 眠聲
 暑ごさ寝られんよつて夜店へ來 同
 ひゞ藥夜店の町へ買ひに行き 同
 眼の病氣今菜の花の盛りなり 同
 辻占を買ふごさは俺も迷ひしか 同
 盃を今宵妾の手からうけ 放馬
 盃を廻して酔ふた顔をする 同
 ある上につがご下戸は恐れ入り 同
 後れ馳せ盃ばかり飛んで來る 二九六
 盃の手付よつほご飲ける口 越村
 無理な猪口重ね女の氣を試し 三 笑
 頂きませうご正座を解はず氣の 万よし
 やごこしいた盃なご少し酔ひ 同
 むかついた手付盃置かず呑み 同

貧乏と仲よしの

私の川柳想

五月の日記から

安川久流美

××社の編輯室——向ひあつた机に
 仕事を一しよにしてゐた白露さんが、
 間々に一服吸つてゐる、きざみ煙草が
 白いけむりを吹いて、いかにもうまさ
 うである、バツトばかり吸つて、仕事
 がいそがしくなるこ、半分は不經濟に
 なる私の巻煙草よりも、きざみの方が
 よい——これからオレもきざみにしや
 う、と思つた頃が、白露さんとお別れ
 せねばならぬ運命の迫つた日である。
 又私は毎日——大概家からの辨當を
 食べてゐた、アルミニウムにつまつ

た、まばらな、麥めし、鹽鮭の焼身な
 ぎ——腰辨の名にはぢない献立である
 白露さんは最初、ひるめいを、うきん
 一ツに代へてゐるたが、いつの間にか、
 私共共鳴して、同じくアルミニウム
 の辨當になつた、そして、朝の早い人
 だから十一時を過ぎるこ、筆持つ手が
 箸をもつのである、めしは至つてすく
 ない方である多くなつたべるこ
 『晩酌がまづいから……』
 こいふ理由であつた、そして白露さん
 の晩酌は、夜寝るための酒で、晩酌後
 は決して外出せないこいふ至つてくせ
 のよい酒だつたのである。
 さて白露さんが私と同じ社につこめ
 て、アルミニウムの辨當に共鳴して
 下さつたのに反し、私が四ヶ月餘りも

きざみ煙草にナゼ共鳴せなかつたか
 現在たゞそれだけが残り惜しい氣持が
 してならない、で私は五月の末から、
 家にゐる時、成る可くきざみを吸ふこ
 みにした、それもブルジョア式の『薩
 摩刻や』『富貴煙』ではない、五匁五
 錢の『なでしこ』こいふプロ階級のも
 のである、しかしこのマジイ煙草も吸
 ひつけるこ別段、くさくもない、いつ
 れは、けむりに消れてしまふものだけ
 ら、家にゐて、之で我慢出来るものな
 ら、この上政府がタバコの値上げした
 つて、敢て恐るゝに足らない。
 『なでしこ』ツて名がいかにも、優し
 いやうであるが、煙草では○以下の
 階級にゐるから面白い、白露さんも、
 確かこの『なでしこ』だつた筈である

白露さんだから、せめて「秋」ぐらい
こは頼んだ洒落になるが、こに角経濟
觀念のある人である。編輯で半年餘の
つき合で、大分感化されたこはいふも
の、もつて生れた根性は金さへあれ
ば、粉煙草のやうに、ばつばであるか
ら、いつも貯蓄こいふものがない。

今度、俄浪人になつて、はじめて生
活に狼狽いふ段になる、そして好き
なバツトを買ふにも不自由を感じる日
は一週間も前に手をつけた例の「なで
しこ」五匁をくすべてゐる、罰は目の
前、毎日のたばこまで、皮肉な應報
がある。

然しこの窮する所に味はひありで粉
煙草をつめて、フーツミ吹く煙に人生
を見つめるこ、又一しほ快悅をおほぬ

る。そしてその煙の中から偉大な川柳
が浮んで来る——生活の安定する時、
必ずするまい佳句は生れない斯くして
私の川柳思想は貧乏三仲のよいものこ
なつて行く。(六月一日)

く
だ

竹馬居主人

酒の古文は酉である、中の「二」は
水の謂で、他は壺の事、即ち壺中の液
體は酒である、三水のついたのは後世
の産丈けに、説明が勝ち過ぎてゐる。

「爛」の字は一層の俗字、理屈一杯、
熱からず冷たからず、中間愛すべしな
ら間が正しい。

日蓮は酒好きであつた「油のような

酒」に悦に入つた禮狀を信者に書てゐ
る、形容し得てこれ以上の言葉はない
其油味を眞に掬する爲め、永く冷酒黨
であつた私は熱爛結構云ふ兩刀使ひ
こなつた、年の加減だ、徳利は大なら
ざるがよし、一合入程を可なりとする

は最後の不皿が冷びるを怖れる、口
喧しい、酒呑に徳利の研究がないのは
おかしい、素燵で端の尖つたのを火鉢
の灰に突込むで置く、野趣はお粗末な
程風味豊かである、常に適宜の爛が保
たれる、千鳥もよいが今では四隣の空
気が気が添はぬ、いつそ金ピンの成金
風は羨ましい、夢だ、夢だ!!

不皿の底に穴をあけ指で塞いでうけ
た可不皿、古句でお馴染の付け差、古
人の大にこつた讚美者としての餘技は

一段の迫らざる消息を傳へて呉れてる、だが私のような者には氣紛れらしく思はれて真似が出来ぬ、無格好な指に小さい盃は許さぬ、朝顔型はいやだ薄きも厚きも過ぎたるは唇に爽かならず、何度入なごは見し事なし、況んや「武藏野」こは直徑何寸のものでしよう、さう大膽にいつてもコツプ酒

定度、樹の角なご素人の業でない。そうだ、今年は玉菊の二百年忌、木村富子夫人の近作が上演された。明るく光る玉菊が百年忌（古句）さかさまな二百年忌の香供養

(省二)

アンナ吉原情調を残して呉れたのも、川柳でよく言はれぬ——家名からしてなまくらな茂左衛門——のお蔭である奈良茂は河東節が好きだつた『浮ぶ瀬は竹婦人が彼れの爲めに作つたこある盃の名だ、玉菊は拳まわしが得意で

あつた、近世奇跡考等に詳しい、大酒のため二十五で逝つた、惜まれる命が奔放である。

水鳥記はよむだ事がない——藥屋はさこだくみ水鳥記——鶴の真似で飲む千住の水鳥記——李白かくるみ樽次が出るさころ——樽次の辭世。

南無三寶あまたの樽を呑みほして身はあき樽さかくるふる里

酒戦の盃は蜂と龍の蒔繪もの、サスミノムの謎死むだら備前の土となりた、せめて備前徳利もなつて腹いづばい呑みたいの遺言はさうだ、金砂子の高點句に「盃を持つて死たい願ひにて」

名古屋の佐々木桂雨さん——珍書を車に載せ圖書館へごんく寄贈される事て有名な川柳趣味家のお宅——の前側に古風な格子造の店「鬼ころ吉」の看板がある。

三州の火入だろろうご大江山三州の鬼ころしだご石田勢頼光へ三州酒をきこりくれば一度試飲をやつてみたいと思ふが、いつも體の具合で果さない。

百薬の長み李白は初手によみ——酒で詩をつくれれば餅で歌をよみ——一樽で三百五十詩をつくり——李白近所の酒やかりだらけ——詩をつくるのがいつちい、上戸なり——能因は右の手李白左の手——詩の出来る度びに徳利が軽くなり——詩百篇元手が二貫五百なり——一升は夢の如し李白のみ——四日目に空樽をうる李太白——池田伊丹を見せたいは李太白——李太白返り字のあるくだをまき——長安のしけ鹽家で李白のみ——長安の酒屋李白に倒される——李太白一合づゝに詩をつくり——なご李白の句は實にウルサイ程ある、古川柳家は少からず模倣性がある

つた、彼れは一世の英傑で一大詩人ではあつたが、彼れの酒は獨酌趣味である、自ら高風を持して居た、陶淵明は然らず、淵明に於て眞に川柳式の大衆共樂感興がありはしなかつたが、相手を選ばない、平凡人になつて酔ふを好むだ。

菊に酔をかけて淵明のんでゐる十日には陶淵明も紫金錠

「富貴地位座」に

大上上吉 萬屋己之助 飯田町

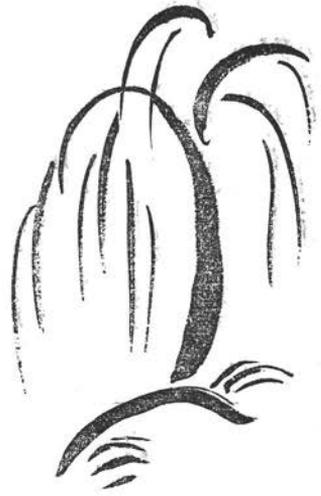
其名は當地にかくれなきひんびし 眞上上吉 内田清左衛門 神田

お店の賑寺ひ買人はほんに満願寺

こある、此の伊丹の鴻池の中池田の満願寺屋九郎右衛門は、清酒の元祖争ひをやつてゐた、山陽が大提灯持をやる頃は、江戸ツ子は借金こりも鷹の聲に劍菱孤を冠つて殺酔されてゐた、古句に劍菱謙仰が多い(川柳江戸名物参照)所が満願寺吟は
正法にふしぎ酒屋に寺の號
満願寺つぶ六殿のだんな寺

いづれ菩薩も道明寺満願寺位で一寸對抗が仕兼ねる、幸に弱者に味方する記事が大毎紙に載つた、記さして頂かう池田酒造の起源は遠く鎌倉時代に發したもので、満願寺屋九郎右衛門が往古御酒寮の寄人から、清酒醸成の秘法を傳へられたといふのである、満願寺屋は古く川邊郡満願寺村から池田に移つたもので酒造業を營んだのは遠く應仁戰亂の當時に傳へられてゐる、攝陽落穂集によれば東武將軍家御前酒は満願寺屋九郎右衛門より發出せるなり、熊野田村の米を以て既米とし水を清め道具を改め造り出せるなり、江戸表にて満願寺と呼ぶ酒これなり(中略)更に元祿十年の統計を調べてみるに釀造家三十有八戸、その石高一萬千二百三十二石を算し、其筆頭は満願寺屋九郎右衛門の千百三十五石であつた、その時伊丹は如何にふに釀造の戸數僅かに八戸石高も總計九百七十七石五合に過ぎなかつた云ふ(中略)偶々江戸に落首あり、あま酒

宗旨違ひの満願寺勤めて下戸に珠數を切らせん、ここの橋洲門の高足、醉龜亭天の廣丸の狂歌であつたが、満願寺酒の盛名が、八百八街に鳴りいびたこことが偲ばれる」
「パーにいつて安直に女にからかふ御當世到底酒に溺れ女に酔ふこは出來ない、女好き酒好きは心から味はふ、戀酒の甘味は泥愛泥醉 没思量底のものである、謂はゞ女酒をおもちやにしてゐる技巧では、憧憬の川柳が生れぬ、女の詩、酒の詩、洵に難い、咄哉咄哉!!」
大伴の旅人「酒の名を聖におほせし古の大き聖の言のよろしさ」寒山詩
「満卷才子詩、溢盡聖人酒、行愛觀牛犢、坐不離左右、霜露入茅檐、月華明」
「廬、此時吸兩甌、吟詩三兩首」なき時に折りに併せて口づさむ。
……浴衣を着るスグレを巻いて新緑をみる酒を呼んで穉をよみ返す六月六日夕……



川柳塔

○ 塚崎 松郎

酔はねば言へず酔へば悲しき
小揚枝の先に薄情ぶら下り
お前ぎこそ悪いのかさ珍らしい夫
緞持てば持つで新聞記者が来る
子の寢息寢て讀む本の上を這ひ
女房に嘘の値段で買ふて来る
胡瓜を漬けて借金もなし
まあ茶でもお入れ格氣もいゝけれど
馬に乗つて今日は許嫁を訪はん

○ 黒木 莢豆

親方の晝寢へ馬さ戻つて來
雷にほんごの母の心が出
火葬場に踏切番のやうなが居
町へ出て夫に似てる人ばかり
馬鹿の子へ土産を買つて歸りけり
つぎつぎにあきらめてゆく佛の子
ぐつぐつ煮つまる音に似し思ひ
天下晴れて小便すれば雲雀啼き
誘蛾燈けふもおんなじ客がくる

よしさいへばびたご止る肩の手のかわゆし

○ 喜田 飯山

バリカンミ椅子ミを持つて表へ出
これからが町内になる朝がへり
女工ミ女工男のこごで物いはず
商賣をかへるに母は氣のりせず
小判でも出さうに工夫掘つてゐる
白靴を奥さまのいふこごに干し
駄目だらう僕の係でないけれど
日曜日拜復なご書いてゐる
ひごごほり金を遣うて嫁を持ち
何を見てゐるのか窓を拭いてゐる
損をする度父も老け母も老け

○ 林田 馬行

飛乗りへ車掌云はんごして黙り
梅雨の電車で喧嘩してゐる
妻の云ふ通りも出来ず暗くゐる
飛下りる氣になるのですバルコニー

○ 酒井 駒人

母にすりやお前ばかりが案じられ
氷屋の準備ミ見わた庭が出来

○ 森田 輝翠

損をする商賣にまで場所を撰り
幸福が馬鹿扱ひにされてゐる
素通りはちご飽かれてる氣味があり

○ 岩崎 柳路

謠曲の本も入れてる折靴
ごほけて妻の枕にけつまづき
他所行の藝者は眼鏡等をかけ
憧れの旅を續けて女死に

○ 庄万よし

ごもすれば社會組織に罪を着せ
佛然ごするごを忘れる陽を浴びる

○ 橋本 二柳子

日給の三圓みんなあざむかれ
損をしたごをビールは知らぬなり
けふもまあ無事であつたか運轉手
髪切つて尼になるごは強いご



編輯後記

▼又私が寝た。それがために七月號の原稿がどうなるかと思つてゐたが、案じるよりは生むが易いのだとへて、思つたよりも内容充實で、前號よりも前々號よりも頁数を殖やさればならぬ盛況を呈した。編輯は僕の枕許で二柳子、松郎、馬行、刀三などが集つてやつてくれた。

▲蛭子省二氏は、不斷の努力を續けて本誌のために光彩を放ち、木村半文錢は大阪柳檀の搖籃時代を書いて誌面を賑はせてくれた。馬行も書き、刀三も書いて僕の負擔を輕ろくしてくれた。

▲半文錢氏の原稿を讀むと、僕などさある場合には同じ會合に出てゐて、お互ひに永く知らなかつたことがわかる。僕等の知らない方

を書いてくれてゐるかと思へば僕等の方の事は少しも知らないらしいところゝ氣づく。世の中さいふものは面白いものだと思ふ。あした回想録をお互ひにかきつづけられ、大阪柳檀の搖籃時代が、もつとハツキリすると思ふ。僕もそのうちには書くが日車、松窓、當百、五葉、方好の諸氏にも追ひ／＼書いて貰へば面白いと思ふ。

▲五月に六厘坊忌を管んで、その會報が出る

◆本社七月例会

日時 三日午後七時より

場所 大阪市南區日本橋一丁目
交又點北の辻東入南側

日本橋俱樂部
電話南三四二四番

兼題 「資本家」三句
會費 參拾錢

初心者の來會を歓迎す

時に、故人の思ひ出を偶然にも寄せられた事は何かの因縁であらう。

▲柳談會は六月十三日に開いた。近來の盛況で、ますます白熱的になるのが愉快でたまらぬ。僕が病中で床の中から乗り出し何かしやべらされたほどにうれしかつた。神戸から紋太氏、東洋鬼氏、大阪からはひろし氏、悟郎氏三笑氏などの人達が見えて、一層の興をそへた。▲花童子は東京から伊香保にあそび三度東都に落ちついて、柳路さも握手したさのこ

さ、革郎は公用で十三日に東上した。

▲本誌創刊以來の同人關本雅幽君が今度一身上の都合で退社した。僕は同君の詩才に期待してゐる一人であるから、甚だ遺憾に思つたけれども事情止むを得ないものと見て、一時袂を別つことにした。復活の日の一日も早やからんことをぞんで止まない。▲史風は病氣で櫻井の別邸にこぢこもつてゐるさうである。それがため選句が遅れてゐるのであるから讀者諸君には不懇願ひたい。小生も見舞にゆきたいと思つてゐるが、同様病覺に取りつかれてゐるので承ら／＼顔をあはささない。

右大臣の令嬢も悪るく、月兎も病氣で弱つてゐるさうである。同人大榮りの有様▲いつも弱い方ではひげを取らぬ美の作か近來非常に元氣になつて大いに雄辯を奮ひ、最近の會合を愉快ならしめてゐる。その他の同人は健在である。▲金澤の安川久流美氏から一泊がけて柳談會へ出席する。通知に接したが遂に見へなかつた。酒井枝呂君が大阪市南區瓦屋町五番町三〇増山方へ轉居。(路郎生)

正誤 ▲五月號募集句「密蜂が異人屋敷に菓を造り」善坊は白濁の誤り ▲英豆の句「借りてある二階をさしてかへりくる」「戀の果敢なさお訂正」六月號安治川小集「誰にさもし飲み」訂正 ▲文字は泗水の誤り ▲英豆の句「柔の花の男好きそら豆の色好き春の陽のなかに」と訂正。

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記するこゝ。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこゝ。

募集

第三卷第九號課題

七月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼寢臺 伊東夜叉郎選
- ▼水 柳川 洲 馬選
- ▼榮轉 橋本二柳子 共選

第三卷第十號課題

八月十日締切

(各題二十句以内)

- ▼枕 許 前田 雀 郎選
- ▼商 相元 紋 太選
- ▼家主 森田 輝翠 共選
- 太田 朝陽

每號募集

- ▼近作柳樽(三十句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 塚崎松郎編
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

一部 參拾錢
 六部 壹圓六拾錢
 十二部 參圓
 (共稅郵)

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込かになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしなさい奉

大正十五年六月廿五日印刷

大正十五年七月一日發行

第三卷第七號 (毎月一回一日發行)

- 編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一郎
- 發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
- 川柳雜誌社

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

- 店書捌賣
- (大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
 - (東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田 後藤
 - (金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石探

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あとであんなことを云はねばモツト本が賣れたらうにさ後悔をするところなぞ仲々うれしいおぢさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのだからいふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおぢさんを満足させて下さい。

|| 路 郎 生 ||

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

川柳雜誌社同人

主幹

藤生路郎

岩伊井馬原林橋西德太太河

崎藤上場本田橋西德太太河

柳彦刀月史馬二松徹
朝底

路造三兔風馬陽郎柳雨子行風

龜吉高竹竹塚黑矢柳松

井川見田崎木川
花か柳蘆多松茨洲大

童啞ほ

子人る骨穂聞郎豆臣馬六

藤本井美卯之助

駒生木駒黙

乃作助
乃作助
乃作助

(いろは順)

道頓堀支部
天満支部
岸和田支部
鶴町支部
城南支部
六甲支部
淀川支部

大阪市南區新戎橋南詰
大阪市北區南同心町二丁目一
岸和田市下野町四一九
大阪市港區鶴町三丁目一〇
大阪市東區餌差町二二番地
兵庫縣武庫郡六甲若樂園
大阪市東淀川區南濱町一九四

萬よし
史朝
太田朝
關本雅幽
駒井美の作
佐々木黙
西垣松雨

神戸支部
山口支部
豐中支部
東京支部
函館支部
住吉支部
仁川支部

神戸市湊町一丁目電氣局西
山口縣山口町石原小路
大阪市外豐中榮通二丁目石賀方
東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内
函館市青柳町五〇
大阪市住吉區安立町五丁目二二
朝鮮仁川仲町一丁目八

萬よし
洲馬
馬行
柳路
花童子
雙柳
田右大臣

水了軒のお辨當

に會集...に行旅

山をほめ海をたへてお辨當



大阪梅田
前

水

了

軒

電話 北一八三四番
北一八四〇番

大正十三年三月三日第三種郵便認可（毎月一圓一日発行）
大正十五年六月二十五日印刷 大正十五年七月一日發行

第三卷 第七號（第三十號）

定價金參拾錢